新制國語讀本

新教授要目準據

卷二

375.9
To10
資料室

41461
教科書文庫
4
810
41-1938
200030
1693

昭和十三年二月一日
文部省檢定濟
中學校國語漢文科實業學校國語科用

學習院教授　東條操編

新制國語讀本　卷二

新教授要目準據

東京
大阪　三省堂

資料室
375.9
T.010

二宮先生畫像（岡本秋暉筆）（第五課參照）

廣島大學圖書之印

廣島大學教 39479 圖書

卷二　目次

一　菊の馨　石井國次　一
二　美しい日本　山村暮鳥　一一
三　良夜　德冨蘆花　一七
四　名將の雅懷　湯淺常山　二〇
　一　持資歌を嗜む　二〇
　二　蒲生氏郷　二三
五　二宮尊德　幸田露伴　二四
六　二宮翁夜話　福住正兄　三一

七 仕事をする興味　小酒井不木　三六
八 他山の石　四八
九 研　西條八十　五〇
一〇 渡り鳥　薄田泣菫　五二
一一 求麻川　橘南谿　六〇
一二 吾輩の運動　夏目漱石　六七
一三 發明家エヂソン　野邊地天馬　七四
一四 木村重成　額田六福　八六
一五 滋賀の山越　村井弦齋　九四

一六 史傳を讀むべし　大町桂月　一〇六
一七 一年のをり〳〵　一一〇
一八 君が代の歌　芳賀矢一　一一五
一九 たのしみは　橘曙覽　一一八
二〇 雪國の春　相馬御風　一二〇
二一 土の歡喜　河井醉茗　一三〇
二二 滿洲國の住み心地　上田恭輔　一三二
二三 汝の母　姉崎嘲風　一四六
二四 安宅　坪内逍遙　一五六

二五　我が幼時　新井白石　一六三
二六　理想を持つて進め　下村宏　一七〇
二七　世界三都の印象　鶴見祐輔　一七五

——目次終——

廣島大學圖書之印

新制國語讀本　卷二

一　菊の馨

石井國次

石井國次
宮中顧問官。茨城縣の人。明治七年生。

允文允武
感佩
拔群

今上天皇陛下の允文允武におはしまして、萬民の上に君臨せさせ給ふべき聖德をそなへさせ給ふことは申すも畏きことながら、御幼少のみぎり、學習院御在學中の御事どもを拜し奉るにつけても、まことに感佩に堪へぬことが多いのであります。

まづ第一に驚嘆し奉るは、御記憶の拔群にあらせられ

聯絡　系統

詳細　徹底的

聖德太子　第三十一代用明天皇の第一皇子、厩戸皇子。推古天皇二十九年(一二六一)薨、御年四十九。

聖德太子の憲法　推古天皇の十二年(一二四)聖德太子が作られたもの、十七條ある。

三寶　佛・法・僧。憲法第二條に此の文字がある。

驚嘆

ることであります。今まで多くの學生に接して參りましたが、陛下のやうに御記憶の強いお方は見受けたことがありません。蟲の名でも貝の名でも、聯絡も系統も無いことまで、一度お覺えになつた以上は、決してお忘れになるといふことがありません。

かく御記憶の拔群な上に、御研究心が非常にお強く、何でもよい加減にして置くことがお嫌ひで、詳細に御質問になり、また御自分で徹底的に御研究になるのであります。例へば歷史で聖德太子のことを申し上げると、お歸りになつて參考書をお調べになり、聖德太子の憲法とはどんなものか、三寶とはどういふことかと御研究になる。

理科で蝶の御話を申し上げると、蝶類圖說をお調べになつたり、さかんに御採集になつたりして、日本產の蝶は勿論、外國產のものまでも御觀察になる。或は電氣の御話を申し上げれば、種々の機械をお取寄せになつて御實驗遊ばされ、無線電信や電話のことまで、すつかり御理解になるといふ風であります。旅行・登山の御趣味も御豐富であらせられ、單なる御運動としてのほかに、地圖や案內記をよくお調べになり、其處の產物や、動物・鑛物から氣象のことまで熱心に御研究になる。萬事がかういふ風であらせられるから、御知識が豐富で且深みのあらせられることは、實に驚嘆し奉る外はありません。

明治神宮
東京市澁谷區代代木に在り、明治天皇・昭憲皇太后を祭り奉る。

明治天皇
第百二十二代。御名は睦仁。明治四十五年崩御、寶算六十一。

明治神宮に參拜して、明治天皇の日常御使用になつた御調度品を拜觀したものは、誰でも其の御質素なのに感泣しないものは無いと思ひますが、陛下も亦御同樣に、華美がお嫌ひであらせられます。例へば、御學用品等も全く一般學生と同樣なものをお用ひになり、鉛筆などは、當時一錢五厘の鷲印のを好んで御使用になり、しかもそれが極く短くなるまで、決してお棄てになりません。消ゴムも當時四五錢位のものを、豆粒程になるまで御使用になり、御帳面でも、半紙や畫用紙でも、決して無駄には遊ばしませんでした。それで大正三年三月、陛下が初等科を御卒業あらせられました時、御高德を一般兒童に拜せし

碑益
背嚢
標本
陳列
綺麗

めたならば、國民教育に碑益する所が多からうと考へて、陛下の御使用になつた背嚢・教科書・雜誌・筆入から、帳面・鉛筆・消ゴム、其の他御製作になつた手工品・圖畫・標本等まで拜借して一室に陳列し、御教室・御控室等すべてを公開して、一週間市内及び近縣の小學兒童に拜觀せしめたことがあります。其の時、毎日何千といふ兒童が校長・教員につれられて參り、私共は手分けをして種々説明を致したのであります。たしか京橋か日本橋あたりの學校と思ひますが、女の子でかなり綺麗な服裝をして、幅の廣いリボンなどをつけて來た一組がありました。私が其の女生徒たちに説明をしてから、「皆さんは、殿下でさへかやう

日課

組織的

に御質素であらせられることを拜見したら、もう立派な着物だの幅の廣いリボンだのを、家庭でおねだりが出來ないでせうね。」と申しましたら、たいそう感激して泣いた生徒が隨分ありました。

陛下は又非常に規律正しいことがお好きであらせられます。朝の御起床から、御拜・御食事・御通學・御復習・御運動・御入湯・御寢まで、實に規則正しい一日の御日課をお守りになつて、御變更になることは容易にありません。隨つて、種々のことを遊ばすにも、すべて規則正しい計畫を立てて、組織的にあそばすといふ御性質であらせられます。

講評

踏切

主張

陛下はまた實に公平無私であらせられます。例へば戰爭ごつこをなされたあとで、私が其の審判や講評などをいたします時、御自分の方に不利なことがお有りになつても、少しもお隱しなさらず御申し出になる。角力で陛下が相手をお投げ遊ばされて、軍配が御自分に揚つても、行司の氣附かなかつた少しの踏切などが御自分にお有りになると、「私に踏切があつたから負です。」と、御主張になる。審判官や行司が少しでも不公平な判定をすると、非常にお嫌ひになる。仲間の者が、「それでお宜しいではございませんか。」などと、申し上げると、「そんな不正直な事はいけない。」と、仰せになる。隨つて、歴史上の事柄

批判
理路井然
公明正大
斷案

を御批判遊ばされる時など、實に理路井然・公明正大で、よく大局から斷案をお下しになる。實に陛下の御心は少しの曇もない明鏡であらせられます。それゆゑ、陛下の御心鏡の前に立つては、正邪善惡の姿がはつきりとあらはれて、少しも隱すことが出來ないのであります。

正邪

陛下は非常に御仁心が深い。どちらかと申せば御口數の少い方で、餘分のことは仰せられないが、まことに思ひやり深くあらせられます。そして御學友や、御側の者に對しても、好き嫌ひといふことが全くなく、一視同仁で、公平に御愛しになります。侍從や侍從武官などに對しても、新舊の區別なしに優しくお接しになるさうです。

一視同仁

舊―奮

誕辰

拜謁

御外遊
大正十年三月より九月まで約六箇月餘に亙つて歐洲各國を御歷訪あそばされた。

御陪食

荒ぶ

念頭

しかも舊い人を何時迄もお忘れにならずに、元の侍女や御學友などがお伺ひ申しますと、お喜びになりますし、時時のお召もあります。私共にもやはり其の通りで、御誕辰や其の他の御祝にはお召があり、御機嫌伺に出れば、お喜びになつて、特別に拜謁を許され、御暇の時は何時迄も御引止めになつて、御言葉を賜るのであります。先年御外遊の御時には、私は、ロンドンやパリーでお迎へ申し上げましたが、屢〻御召を蒙つて御陪食を賜り、內外諸名士の前でも『先生々々』と仰せられるので、覺えず感泣した次第であります。人心がだん〳〵荒んで、師恩を忘れるどころか、全く之を念頭におかないやうな青年學生の多い今

到底

間然

現つ神

神々し

日、陛下のかゝる御態度は、實に貴い御模範ではありませんか。

陛下の御盛德を稱へ奉ることは、到底私どもの能くするところではありませんが、要するに、陛下は御天性實に間然する所の無い御方で、現つ神としての神々しい御性格を、先天的におそなへあそばしていらせられると申し奉るほかはありません。

（教育研究）

山村暮鳥
本名は土田八九十。詩人。群馬縣の人。大正十三年歿、年四十一。

二　美しい日本

山村暮鳥

日本。うつくしい國だ。

葦の葉つぱの朝露がぽたりと
おちてこぼれてひとしづく、
それがこの國となつたのだとでも
言ひたいやうな日本。
大海のうへに浮いてゐる
かはいらしい日本。
うつくしい日本。

小さな國だ。
小さいけれど、
その強さは鋼鐵（はがね）のやうな精神である。
おゝ日本。
ぴち〳〵してゐる魚のやうな國。
勇敢な日本。
古い日本。
その霧深い中にとぢこもつて、
山鳥の尾のなが〳〵しい夢を見てゐたのも、
今はもうむかしのことだ。

目をあけて、
そこにどんな世界をお前は見たか。
日本、日本。
お前のことをおもふと、
この胸が一ぱいになる。
お前は希望にかゞやいてゐる、
お前は力にみち〳〵てゐる、
そして眞劍だ。
だが日本よ、

お前の道はこれまでのやうに
もうあんな平坦なものではあるまい。
お前はよるひる絶えず
お前のまはりに打寄せてゐる
その波の音をなんときいてゐるか。
寂しくないか、
おゝ孤獨な
遠い一つの星のやうな日本、
からりとはれた黎明の天空のやうな國。
ときぐは通雲の

さつとかゝるくらゐのことはあつても、
おまへはたゞの一度でも、
その顏面に泥をぬられたことがないんだ、
そんな美しい國なんだ。

日本、
幸福な日本、
強い日本、
わたしはこゝで生れたんだ、
またこゝで最後の息をひきとつて、

遠祖（とほつみおや）らと一緒になるんだ。
墳墓の地だ。
靜な國日本、
小さい國日本、
つよくあれ、
すこやかであれ、
奢るな、
日本よ眞實であれ、
ばかにされるな。

三　良夜

徳冨蘆花

徳冨蘆花　名は健次郎。小説家。熊本縣の人。昭和二年歿、年六十。

枝折戸

佇む

溶々

良夜とは今宵ならん。今宵は陰暦七月十五夜なり。月清く、風涼し。

夜業の筆を擱（さしお）き、枝折戸開けて、十五六歩邸内を行けば、栗の大木眞黑に茂る邊に出でぬ。其の蔭に潛める井戸あり。涼氣水の如く闇中に浮動す。蟲聲蟋々、時々白銀の雫のぽたりと墜つるは、誰が水を汲みて去りしにや。

更に行きて畑の中に佇む。月は今彼方の大竹藪を離れて、清光溶々として上天下地を浸し、身は水中に立つの思ひあり。星の光何ぞ薄き。

氷川の森　東京市赤坂區に在る。

囁く

得眠らぬ。

氷川の森も淡くして煙と見ゆめり。靜に立ちてあれば、吾側なる桑の葉、玉蜀黍の葉は月光を浴びて青光に光り、棕櫚はさや〳〵と月に囁く。蟲の音滋き草を踏めば、月影爪先に散り行く。露のこぼるゝなり。藪の邊には頻りに鳥の聲す。月の明きに彼等の得眠らぬなるべし。

開けたる所は月光水の如く流れ、樹下は月光青き雨の如くに漏りぬ。歩を返して、木蔭を過ぐるに、燈火のかげ木の間を漏れて、人の夜涼に語るあり。

枝折戸閉ぢて、緣に踞する程に、十時も過ぎて、往來全く絶え、月は頭上に來りぬ。一庭の月影夢よりも美なり。

月は一庭の樹を照し、樹は一庭の影を落し、影と光と黑

無熱池　印度のヒマラヤ山の北に在ると傳へられる池。

白斑々として庭に滿つ。緣に大なる楓の如き影あり。金剛纂の落せるなり。月光其の滑らかなる葉の面に落ちて葉は宛ら碧玉の扇と照れるが、其の上にまた黑き斑點ありてちら〳〵躍れり。李樹の影の映れるなり。

月より流るゝ風、梢をわたる毎に、一庭の月光と樹影と相抱いて跳り、白搖ぎ黑さゞめきて、其の中を歩するの身は、是れ無熱池の藻の間に遊ぶの魚にあらざるかを疑ふ。

（自然と人生）

湯淺常山
名は元禎。字は文祥。江戸時代の儒者。天明元年(一七八一)歿、年七十四。

四 名將の雅懷

湯淺常山

一 持資歌を嗜む

太田左衞門大夫持資は上杉宣政の長臣なり。鷹狩に出でて雨に逢ひ、或百姓の家に入りて、「蓑を借らむ。」と言ひしに、若き女の何とものを言はずして、山吹の花一枝折りて出しければ、「花を求むるに非ず。」とて、怒りて歸りしに、これを聞きし人の、「それは七重八重花は咲けども山吹のみのひとつだになきぞ悲しき」と言へる古歌の意なるべし。」といふ。持資駭きて、それより歌に志を寄せけり。

太田持資（佐藤篠里筆）

七重八重云々。後拾遺集、中務卿兼明親王の作。

或時、宣政下總の廳南に軍を出しし時、山涯（やまぎは）の海邊を通るに、「山上より弩を射懸けられむや、又潮滿ちたらむや計り難し。」とて危みける。をりふし夜半の事なり。持資「いざ見て來らむ。」とて馬を乘出し、やがて歸りて、「潮は干たり。」といふ。「如何にして知りたりや。」と問ふに、

遠くなり云々　冷泉爲守の歌。爲守は連歌の名家。曉月法師といふ。嘉暦三年(一九八八)歿。

そこひなき云々　古今集、素性法師の歌。

「遠くなり近くなるみのはま千鳥
なく音に潮のみちひをぞ知る」

と詠める歌あり。千鳥の聲遠く聞えつ。と、言ひけり。

また何れの時にや、軍を返すとき、これも夜の事なりしに、利根川を渡らむとするに、暗さは暗し、淺瀬も知らず。持資また、

「そこひなき淵やはさわぐ山川の
あさき瀬にこそあだ波は立て」

と詠める歌あり。波音荒き所を渡せ。と下知して、事なく淺瀬を渡しけり。

(常山紀談)

蒲生氏郷　信長・秀吉に仕へて功をたてた。文祿四年(一五九五)歿。

江州　滋賀縣。

會津　福島縣にある。

細川忠興　信長・秀吉・家康に歴仕し、後、豐前國(福岡縣)に封ぜられた。正保二年(一六四五)歿。

なき名ぞと云々　「後撰集」にあるうた。

二　蒲生氏郷

蒲生は元江州の士にて、佐々木の臣なり。氏郷、伊勢松阪十二萬石なりしが、後、會津百萬石を太閤より拜領したる無雙の猛將なり。氏郷の許に佐々木が鐙といへる名高き器あり。細川忠興いと懇に「我に賜はれ。」と請はれしかば、家臣某「是は世久しく傳はりし物にて候。似たる鐙を贈り給へ。」といひければ、氏郷

「なき名ぞと人にはいひてありぬべし
心のとはばいかゞこたへん」

といふ歌の恥かしきよ。」とてかの鐙を贈られけり。

(「常山紀談」に據る)

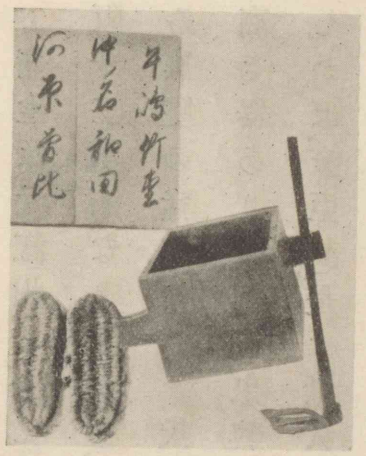
幸田露伴
名は成行。文學博士。文學者。東京市の人。慶應三年（一八六七）生。

天明七年
皇紀二四四七年。

五二宮尊德

幸田露伴

徒らに起き、徒らに眠り、空しく食ひ、空しく衣て、何事も爲すなきは、禽獸にあまり遠からぬ人なれば、尊ぶに足らずといふべし。學んで知を蓄へたる人は尊ぶべし。勤めて業を成せる人は又尊ぶべし。志して道を求むる人は愈〻尊ぶべし。二宮尊德先生は、今もなほ數多の人に神の如く尊ばるゝ近世の君子とも豪傑ともいふべき人なり。



二宮尊德遺物
（習字手本・斗桝・鍬・草鞋）

先生は、天明七年七月二十三日、相模國足柄上郡柏山村

酒匂川
靜岡縣駿東郡、富士山の東麓に發する。長さ四十七餘粁。

といふ片田舍に生れたり。先生の五歲の時、酒匂川の洪水に田畑の荒れはててよりは、もとより貧しかりし家の愈〻貧しくなりて、先生と先生の弟三郎左衞門・富次郎の二人とを育つる事だに容易からぬほどなりき。先生その中に漸く長じ、草鞋を作り、それを賣りて酒を求め、夜毎に父に進めたり。

十四の年、賴みとしたる父に別れて、貧苦いや增せり。母は是非なく、「汝と三郎左衞門とは如何にしても養ふべけれど、末子までは力及ばず。詮方なければ、緣者の許に預くべし。」とて、心强くも富次郎を他處に預けたりしが、流石恩愛に引かされて、夜毎に眠もせざる樣子なり。先

寢ぬ

いぶせし

生之を見て、「何故に毎夜やすゝと寢ね給はざるか。」と問へば、母は、「乳の張る故に。」と言ひ紛らはし、よそを向きて、涙を隱し、悟られじとするを、先生早くも察して、涙にうるむ眼をしばたゝきつゝ、「何程貧に迫ればとて、赤子一人ぐらゐ、物の數にもあらじ。夜さへろくゝ御よりなされぬ悲しみをかけたてまつるよりは、小腕ながらも明日より山に薪こり、それをひさぎて弟を養ふほどのことは致すべし。早、かの子をとり返したまひてよ。」といへば、母は悅びて夜の更けたるをも厭はず、直ちに隣村に到りて事の仔細を語り、富次郎を引取りて抱き歸れり。

是よりいぶせきあばらやの中にも、親子四人恙なく打

羅—羅

揃ひて、顏見合するを樂しみ、先生は朝まだきより山に入りて薪を採り、夜は更くるまで繩をなひて草鞋を作り、一寸の光陰をも惜しみて、ひたすら母のため弟のためと日毎に勤め勵みたり。この間にも、先生は、「人と生れて、聖賢の道も知らずに過ぎなんは、口惜しきことの限りなり。」とて、纔に得たる大學といふ本を常に懷に離さず、薪こる山路の往き復りに歩みながら讀みたり。その心掛誠に尊し。

十六の年には母さへ疾に罹りて、三人の子を遺して世を去りたれば、先生は何一つなきあばらやの中に、まだ幼き二人の弟をかき抱きて歎き悲しむばかりなりき。親

類たちはこの様を見かねて、互に相談をなし、仲と季との二人を川窪某引取り、先生一人は萬兵衞といふ伯父の許に養はれたり。

萬兵衞、先生が終日立働きて、夜なほ學問の道をたどりけるを見て、「われ、汝を養ふに多額の費用を要す。まだ力なき汝の働き、なに程の補ひになるべきか。さるに、それをも省みずして自分勝手の夜學に、わが油を費すは不屆なり。」と叱りこらすに、先生は爭はず、「さりとて一生文盲の人とならんも殘念なり。わが自力にて學問せば、まさかに叱もせざるべし。」と思ひければ、川べりの荒地に菜を播きて、七八升の實を得、燈油に代へて夜々獨り苦學せ

植ゑる。
穫—獲—護

り。萬兵衞、また叱りて、「學問せんより繩をなひてわが家事の手助せよ。」といひかけたり。先生はこれにも逆はず、繩なひ、筵織りなど、油斷なく立働きたる後、ひそかに燈を點じ、衣にて燈火の漏れぬやうに蔽ひかくして、勵み勉むるわが心をわが師となし、鷄の鳴く頃まで、毎夜讀書しけり。その辛苦のほど、察しても涙のこぼるゝばかりなり。

このうちにも、先生が家を興さんと思ふ心は、未だ一日も撓まず。人のかまはぬ土地を耕し、人の棄てたる苗を拾ひて、其處に植ゑつけ、一俵餘の收穫を得たり。先生大いに喜び、「少きを積みて多きをなすは自然の道なり。今

こそ僅に一俵なれ、これを種として勤勞せば、わが家を興すこともなるべし。」とて、法を考へ、力を盡して、油斷なく勤めたれば、遂に多くの收入を得たり。是に於て、數年間の養育の恩を謝して、萬兵衞が家を辭し、人住まざればいとゞ荒れ果てたるわが舊宅に立歸り、草を拂ひ、屋根を繕ひ、たゞ一人必死となりて家業を勵み、粗衣も厭はず、粗食も厭はず、千辛萬苦に堪へ忍びて、田畑も遂に買ひ戻し、立派とまでにはゆかざれども、全く一家を興すことを得たり。嗚呼、先生の將來大いなる事業をなしたるも、この時までの心掛によるといふべし。

（「露伴叢書」に據る）

六　二宮翁夜話

福住正兄

福住正兄。國學者。神奈川縣の人。明治二十五年歿、年六十九。

一　簣

大事をなさんと欲せば、小なる事を、怠らず勤むべし。小積りて大となればなり。凡そ小人の常、大なる事を欲して、小なる事を怠り、出來難き事を憂ひて、出來易き事を勤めず。それ故、終に大なる事をなす事能はず。小の積んで大となる事を知らぬ故なり。譬へば百萬石の米と雖も、粒の大なるにあらず、萬町の田を耕すも、其の業は一鍬づつの功にあり。千里の道も一歩づつ歩みて至る。山を作るも一簣の土よりなる事を明らかに辨へて、勵精

刎ぬ

小なる事を勤めば、大なる事必ずなるべし。小なる事を忽せにする者、大なる事は必ず出來ぬものなり。

二

松明盡きて、手に火の近づく時は速に捨つべし。火事あり危き時は荷物は捨てて逃げ出すべし。大風にて船くつがへらんとせば、上荷を刎ぬべし。甚しき時は帆柱をも伐るべし。此の理を知らざるを至愚といふ。

三

家屋の事を、俗に屋船又屋臺船といふ。面白き言葉なり。家をば實に船と心得べし。これを船とする時は、主人は船頭なり、一家の者は皆乘合なり、世の中は大海なり。

安閑

然る時は、此の屋船に事あるも、又世の大海に事あるも、皆遁れざる事にして、船頭は勿論、此の船に乘合ひたる者は、一心協力此の屋船を維持すべし。さて此の屋船を維持するには、舵の取りやうと、船に穴のあかぬやうにするとの二つが專務なり。此の二つによく氣をつくれば、屋船の維持疑ひなし。然るに舵の取りやうにも、心を用ひず、屋船の底に穴があきても、これを塞がんとせず、安閑として過し、終に屋船をして沈沒するに至らしむ。歎息の至ならずや。

四

暴風に倒れし松は、雨露入りて既に倒れんとする處の

翁　二宮翁。

木なり。大風に破れし籬も、杭朽ち、繩腐れて將に破れんとする處の籬なり。それ風は平等均一に吹く物にして、松を倒さんと殊更に吹くにあらず、籬を破らんと分けて吹くにあらねば、風なくとも倒るべきを、風を待つて倒れ破れたるなり。天下の事皆然り、鎌倉の滅亡も、室町の滅亡も、人の家の滅却も皆同じ。

五

硯箱の墨曲れり。翁之を見て曰く、總べて筆を執る者は心を正平に持たんと心掛くべし。譬へば此の墨の如し。誰も曲げんとて摺る者はあらねど、手の力自然傾くが故に此の如く曲るなり。今之を直さんとするとも、容易に直るべからず。百事其の通りにて喜・怒・愛・憎ともに、自然に傾く物なり。傾けば曲るべし。能く心掛けて心は正平に持つべし。

六

「山芋掘は、山芋の蔓を見て、芋の善惡を知り、鰻つりは、泥土の樣子を見て、鰻の居る居らざるを知り、良農は草の色を見て、土の肥瘠を知る、みな同じ。所謂至誠神の如しといふものにして、永年刻苦經驗して、發明するものなり。技藝に此の事多し、侮るべからず。」

小酒井不木
名は光次。醫學博士。小說家。名古屋市の人。昭和四年歿、年四十。

第三學期　七

仕事をする興味

小酒井不木

うきことのなほこの上につもれかし
限りある身のちからためさん

この歌を口ずさんでゐると、大抵の人間は、たとひそれが一時的であつても、愚圖々々しては居られなくなる。さうして自分の過去をふりかへつて見て、恥かしさに堪へぬ氣持が湧いて來るであらう。

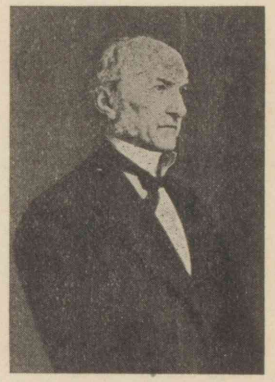
どんな仕事であつても、仕事と名のつく以上、多かれ少かれ、苦しみを伴はぬものはないが、もしすべての人が、仕事の苦しさに出逢つたとき、この歌を口ずさんだならば、

グラッドストン
英國の大政治家（西紀一八〇九―一八九八）。

恐らく苦しさそのものが一種の樂しみとして迎へられるに違ひない。

ところが多くの人は、兎角、苦しみを避けて仕事に從事しようとする。仕事そのものに眞の興味を見出し、勞苦そのものに眞の愉快を覺えたならば、恐らく失業の悲運を避けることが出來、貧乏の苦難を逃れることが出來るであらう。昔から世に勝れた人は、いづれも仕事することに無限の喜びを感じ、勞苦そのものに此の上なき幸福を感じた人である。

グラッドストンが九十歳近くなつた時、「私は勞苦に最大の幸福を發見した。私は若い時分に勤勉の習慣をつ



ントスドッラグ

けたが、その勤勉の習慣をつけたといふことが、立派な勤勉の報酬であつた。兎角、若い人は、休息といふことを、努力を中止するといふことに解釋するやうであるが、私は眞の休息は一つの努力から他の努力に移ることだと思ふ。」といつたのは、誠に尊い教訓である。

偉大なる人には、決して餘生を安樂に送るために勤勉はしない。

彼等は勤勉なることに「安樂」を感ずるから、死ぬまで最大の努力を續けようとする。エヂソン翁が「私は一つの

エヂソン
米國の電氣學者・發明家(西紀一八四七—一九三一)。

ラファエル
イタリヤの畫家(西紀一四八三—一五二〇)。

ミケランジェロ
イタリヤの畫家・詩人・彫刻家・建築家(西紀一四七五—一五六六)。

發明を完成すると、それから後は、もはやその發明に用はない。多くの人は發明から來る收入を、努力に對する報酬のやうに考へるかも知れぬが、少くとも私自身はさうは思はない。私の最大の喜びは努力して仕事することに外ならぬ。」といつたことを考へて見ても、偉人の精神が那邊にあるかを知ることが出來るであらう。

偉人・天才といはれてゐる人には、その生れつきよりも、勤勉によつて、その才能を發揮した人が甚だ多い。如何によい素質を持つて居ても、捨てて置いて光る道理はない譯である。有名な畫家ラファエルをミケランジェロが批評して、「彼の偉大なところは彼の天才よりも彼の勤

勉に負ふところが多かつた。」といつたのは至言である。ラファエルは年齒僅に三十七歳で歿したが、それにも拘らず實に二百八十七枚の繪と、五百以上の素描とを殘した。ある人がラファエルに向つて「どうしてこんな偉大な仕事が出來るやうになりましたか。」と尋ねたら、彼はやさしい聲で「私は小さい時分から何事をもおろそかにしなかつたのです。」と答へた。フランスの有名な畫家ミレーも「私は凡べての少年に向つてたゞ『働け』と忠告するだけである。皆が皆天才になることは不可能であるかも知れぬが、皆が皆仕事を

ラファエル

素描

ミレー
フランスの畫家（西紀一八一四—一八七五）。

することは可能である。どんな天才でも仕事をしなければ何にもならぬ。」と說破した。

兎角人は、自分の仕事よりも他人の仕事を羨ましがるものである。これはいふ迄もなく、どの仕事でも、表面から見れば樂なやうに考へられるからである。だから、いざ他人のやつてゐる仕事に從事して見ると、始めてその苦しさがわかり、やつぱり自分が今迄從事して居た仕事がなつかしくなつて來る。若しすべての人が仕事をするそのことに快樂を感ずるならば、仕事の種類は問題でなくなるのである。だからホレース=マンも「自分の現在

ホレース=マン
米國の教育家（西紀一七九六—一八五九）。

の仕事を嫌つて他の仕事に移る人の氣が知れない。私にとつては仕事をすることが、魚の水に於けるやうな關係になつた。」と言つて居る。

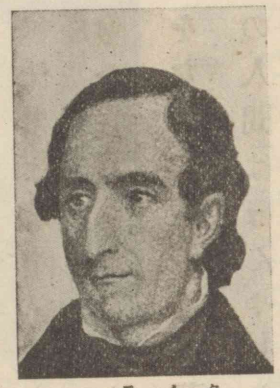
どんな職業に從事してゐても、決して職業が人間の品性を左右するものではなく、職業に從事する人の心の如何によつて、その職業は卑しくもなり、又尊くもなるものである。

職業の爲に手や足を汚染することは、決してその心を汚染することではなく、むしろ却つてその心を清淨ならしめるものといつてよい。外見上汚い職業に孜々として働いて居る人の姿を見るとき、崇高な感じこそすれ、汚

ソロモン　西紀前十世紀頃のイスラエルの王。

タイラー　アメリカ合衆國第十代の大統領（西紀一七九〇—一八六二）。

いといふ感じは毛頭もしないのである。だからソロモンの箴言にも、「汝、かの事務に勤勉なる人を見ずや。彼は國王の前に立つことを得べし。」とあつて、如何に「勤勉」の尊いかが示されてゐる。


タイラー

アメリカ合衆國の大統領タイラーが、任期が滿ちて辭職すると間もなく、彼の政敵は、彼を飜弄するつもりで、彼の居住する村の測量師に選んだ。するとタイラーは、いやがるどころか、喜んで其の職を引受け、而も一所懸命に仕事をした。これにはさすがの政敵たちも降參して、もういゝ加減に辭職してはど

うですか。」と勸めると、タイラーは平然として、「私はどんな仕事でも引受ける代りに、一旦引受けたら決して辭職は致しません。」と返答した。

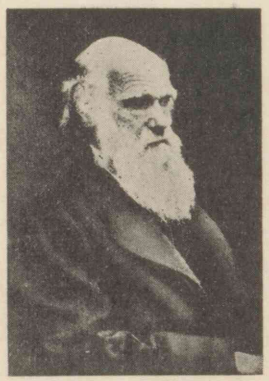
仕事は人間を尊くするばかりでなく、人間を種々の危險から遠ざからしめるものである。「小人閑居して不善をなす。」といふ言葉があるとほり、小人に限らず、凡べての人間は、ぼんやりして居るときは、決して碌なことを考へるものではない。犯罪學上の統計を見ても、倦怠が、各種の犯罪の極めて重大な原因となつて居るのである。オーウン＝フェタムは「事務の中に生長しない者は、最も下劣な人間だ。」といつたが、私は、「仕事をしない人間は最も

小人閑居して云云
「小人閑居爲ニ不善ヲ。」
（大學）

フェタム

危險な人間だ。」と言ひたいのである。

何事に從事するにも、兎角人は仕事を早く爲し遂げたいと希望する傾向がある。いはば成功を急がうとするのであるが、これも畢竟するに、勤勉と勞苦そのものに快樂を發見し得ないがためである。眞に勤勉な人は、一面から云へば、ダーウインの蚯蚓の研究は、實に前後三十年間かゝつて居る。文豪ゴールドスミスは一日に四行づつ書けば十分な仕事だといつて、「荒廢したる村」を書くのに前後七年



ダーウィン

ダーウィン
英國の博物學者（西紀一八〇九—一八八二）。

ゴールドスミス
アイルランドの詩人（西紀一七二八—一七七四）。

を費した。而も彼はその四行を書くのに、一日中かゝつて、うん〳〵苦しんだものである。

急がずば濡れざらましを旅人の
あとより霽るゝ野路のむらさめ

といふ歌のあるごとく、成功を急ぐといふことは決して成功を齎らす近道ではないのである。有名なローマ衰亡史を書いたギボンは、第一章を三度書き直して始めて滿足したといはれて居るが、全篇を完成するのに實に二十五年の歳月を費した。

ギボン
英國の歴史家
（西紀一七三七—一七九四）。

人間は如何に努力し勤勉しても、若し勞苦そのものに

快樂を覺えるならば、決して「過勞」といふ現象を生じない。「過勞」といふ現象の生ずるのは、成功を急ぐか又は勞苦に興味を持たぬからである。

だからスタンリ卿も、「どんなにはげしい仕事をしても、確乎として規則正しく進んで行つたならば、決して身體を害するものではない。」といつた。實際若し、過勞のために病氣になつた人があるならば、私はその人が仕事に對する興味を少しも持たなかつた證據だと思ふのである。

（小酒井不木全集に據る）

スタンリ
英國の探檢家
（西紀一八四一—一九〇四）。

八 他山の石

他山の石以て玉を攻くべし。

他山之石可以攻玉。（詩經）

賢を見ては齊しからんことを思ひ、不賢を見ては内に自ら省る。

見賢思齊焉、見不賢而内自省也。（論語）

青は藍より出でて藍より青し。

青出於藍而青於藍。（荀子）

蓬麻中に生ずれば、扶けずして直し。

蓬生麻中、不扶而直。（荀子）

桃李言はざれども、下自ら蹊を成す。

桃李不言、下自成蹊。（史記）

人一たび之を能くせば、己之を百たびし、人十たび之を能くせば、己之を千たびす。

人一能之、己百之、人十能之、己千之。（中庸）

西條八十
詩人。早稻田大學教授。東京市の人。明治二十五年生。

九　谺（こだま）

心が寂しくなつた時、
心が小さくなつた時、
僕は山へ登るんだ。
長い草を踏みしだき、
暗い並木を駈けぬけて、
僕は山へ登るんだ。
山のてつぺん、青空だ、
廣い、深い青空だ、

西條八十

遠くの町は豆粒だ。
僕は大きくどなるんだ、
「見てゐろ今にえらくなる。」
すると谺が返すんだ、
「見てゐろ今にえらくなる。」
僕の心は輕くなる、
たとひみんなが知らずとも、
山の谺は知つてゐる、
僕の望を知つてゐる。

（少年詩集）

一〇 渡り鳥

薄田泣菫

薄田泣菫　名は淳介。詩人。文學者。岡山縣の人。明治十年生。

私達が七つ八つの頃には、そろ〳〵秋が更けて來ると、晴れきつた空を毎日のやうに雁が渡つた。私達はそれを見かけると、吹きさらしの野路に立つて、空の一方を振仰ぎながら、

「雁よ棹になれ、棹になつたら鈎になれ。」

と、その長い行列がだん〳〵雲の中ににじみこんでしまふまで、聲を嗄して叫んだものだ。が、いつの間にか雁も少くなつて、今では晝間その長い列が空を渡るといつたやうなことは、よく〳〵人氣遠い野原かどこかでないと滅多に見られなくなつた。

あわたゞしい

その頃は又、後ろの岡に行つて見ると、葉の落ちかゝつた雑木林に渡り鳥が澤山來てゐたものだ。渡り鳥といふと、私は海などを越えて來る彼の小さな旅人のあわただしい旅を考へて、いつも言はうやうのない淋しい旅心地を覺える。渡り鳥の初客といつたら——

ズモ

——さやうさ、まづ百舌鳥とでもいつておかう。秋の彼岸が過ぎてそろ〳〵日影が黄色がかつて來ようといふ頃、私達はどうかすると暖かい日の晝過、そこらの木立で甲高い鋭いその聲を聞く事がある。「あゝ、もう秋だな。」と、思はず振

返つて見ると、矮小な櫟に交つて、ずばぬけて丈の高い楡の木に百舌鳥が一羽止つて、黄色い夕陽を受けて、羽が金のやうにきら〳〵してゐる。私達はその瞬間、言はうやうのない強い健やかな氣持が胸に流れるのを覺える。

鶺鴒

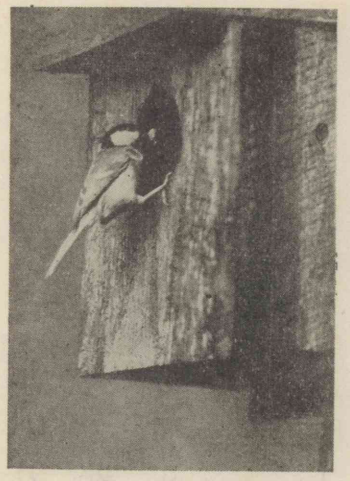
百舌鳥の次には鶺鴒が來る。山家の晝過、だるさうな蟋蟀の聲もいつの間にか止んで、枯葉一つ寢返りを打つ音までがはつきりと耳に入る靜けさの底に、どこやら窶れた人の溜息とでもいつたやうな微な聲が洩れて來て、何の音ともわからない。すると、

韮

樹蔭の韮畑かどこかで、餘念もなく、せつせと仕事に精出してゐた農夫が、ひよいと顏を擧げる拍子に、すぐ鼻先の小枝から、枯葉のやうな小鳥がついと身をそらして逃げていつてしまふ。——それが鶺鴒だ。

鶺鴒といつたら、まるで悲哀を懷いてゐる人のやうに、大抵は連に離れてたゞ獨りで出て來る。そしてそこらの小枝に止るなり、何か眼に見えぬ昔馴染でも招くやうに、ひよくりひよくりと輕い御辭儀をして、囁くやうな聲でうたひ出す。私はそれを見ると、他の爲、世の中の爲といつたやうなわけでなく、自分一人の爲にうたつて、それで滿足してゐる人達を思ひ出さずにはゐられない。

鶲が來てものの十日も經たぬ間に四十雀が來る。この鳥は鶲と違つて十羽も二十羽も群をなして來る。山から里へ移る折などには、まるで時雨でもするやうに、細かい羽音がさつと空を掠めて聞える。そしてそこらの木立におりるなり、めまぐるしいほどすばしこく、雀の甕などを啄きまはしながら、鼠色の背をそらし、柔らかみのある圓い胸を見せて、銀の鈴をふるやうな透き徹つた聲で早口にしやべり續ける。で、かうした大層な群の中には、きつとまだ羽の伸びきら



四十雀

雀の甕
いら蟲の幼期の繭。色白くて乳汁に似てゐる。

きさくな魂

ない、灰色の產毛そのまゝの雛兒が交つてゐて、どうかすると高い枝に止り損ねて、もんどり打つて宙に返ることもあるが、そこは又慣れたもので、いきなりひよいと下枝につかまつて、ませた身振で樹肌のひゞを啄いたりする。まるで山家育ちのすばしこい、きさくな魂そのものを見るやうな氣持がする。

小雪がちらつく頃になると、鷦鷯が來る。これは鶲と同じやうに大抵獨法師で、それもこつそりと附近を忍ぶやうにして來る。冬の初の晝過、山近い田舍の小家で、爺は炬燵に潛り込んで、こくり〳〵と居眠をする。その側で婆さんはせつせと絲車を繰つてゐる。檐に吊した干

菜の影が、煤けた障子に見すぼらしく映つて、時をり、ちつぽけな小鳥の影がちらついたりする。どうかして絲目が切れて、睡さうな錘の音がぱつたり止むと、こそ〳〵と掛菜をむしる音がする。が、老人の耳にそんな音の聽き取れようはずがない。婆さんは俯いたまゝ、また絲を紡ぎにかゝる。さうかうする間に、鳥は舌打をするやうな聲を立てながら、ひよい〳〵と小刻みに籬を傳つて、隣から隣へと狹苦しい物蔭を出たり入つたりして移つて行くのだ。それが鷦鷯である。

鷦鷯と後先になつて頰白が來る。冷たい雨のびしよびしよと降るなかを、獨者の頰白が灰色の胸までぐしよ

ぬれになつて、しよんぼりとそこらの木に止つてゐるのを見ると、私の國でもこの鳥の啼聲を解いて、一筆啓上つかまつる。

子供泣かすな、火の用心。

今度の便に金十兩。

やりたいけれど、一文も御座なく候。

と言ひ傳へてゐるのを思ひ出して、

頰白

しみ〴〵と世渡りのむづかしさと、旅心の寂しさとを思はずにはゐられない。

後ろの雜木林にこんな小鳥が來る頃になると、野にはもうそろ〳〵鶉が來、鷸が來てゐる。

（畿内行脚）

橘南谿
名は春暉。文章家。本業は醫師。伊勢國(三重縣)の人。文化二年(一八〇五)歿、年五十三。

那須・椎葉山
日向國(宮崎縣)西臼杵郡に在る。

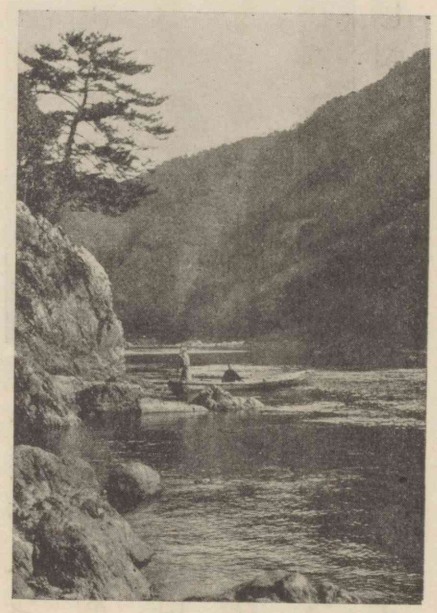
五箇村
肥後國(熊本縣)八代郡に在る。

相良
人吉藩主相良氏。

二 求麻川

橘南谿

肥後國求麻川は九州第一の急流なり。源遠く那須・椎葉山・五箇村邊より出でて、四十里ばかりも流れたり。殊に大河にて、求麻郡の眞中を貫き、求麻の人吉の城下を過ぎて八代に至り、肥後の海に入る。予が歸路には、相良の御舟にて此の急流を下りぬ。船はもとより輕し、人もわづかに予と僕



求麻川

二時

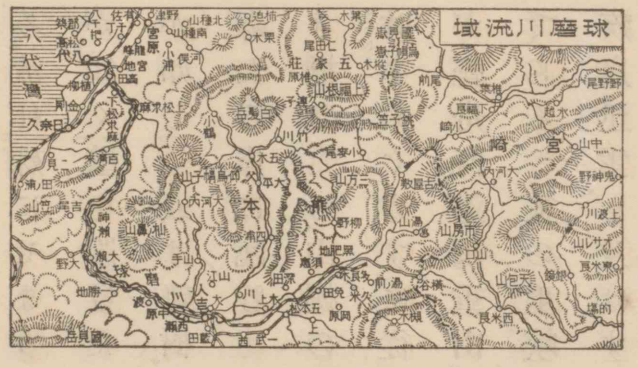
と二人に船人三人、都合五人乘なれば、一入に飛ぶが如く、八代まで十六里の川をわづか二時に下り着きたり。

其の頃は三月の末なれば、春水殊に多きに、人吉御城下青井の宮の前より船に乘れば、送別の人々おびたゞしく打集り、名殘の恨いふもさらなり。高橋・雨森・右田の三士はなほ船に乘移りて酒肴など携へ、纜を解けば、もとよりの急流、見送の人々は霞の中に入りて、招く扇もはや見失ひぬ。盃一つ二つめぐらすひまに、渡と云ふ所まで下りぬ。人々には「つきぬ名殘なり。かへりの陸路も遠ければ、此所より上り給へ。」とすゝむるに、いづくまでといふ限りもなければ、人々も襟をうるほして上りぬ。予もし

ぼし船を離れて、また酒一つ二つくみて別る。

是より下、水逆巻き落ちて殊にすみやかなり。船はいと小さく細く作りて、首尾に梶を附けたり。これは、眞逆様に大岩に流れかゝりたる時、あとばかりの梶にては、船の廻る事遲き故に先にも梶を附けたるなり。常に先の梶を第一に動かして居て岩角を避け、思ふかたに船をめぐらす。又中程に楫を持ちて一人立てり。これは舟を前後左右に動かす爲なり。此の三人の船頭、しばらくも油斷せず舟を操る。浪殊に逆巻く所にいたりては、船の両方に高き板を立つ。これは浪の舟中に入らざるやうとなり。

嶮—儉—驗



十六里の間に四五箇所は、至つて艱嶮の所ありて、浪の高き事山の如く、怒れる岩角浪の間におびたゞしく峙ち出づ。かゝる所にては領主などの通行の時は、瀨越しとて、其の前後四五町或は八九町ばかりも、船を離れて山に登り、此の嶮悪の瀨を越し終りて、又船に乗り給ふとなり。予はいと珍しく覺えぬれば、輿に乗じて、其の瀨をも船に乗りながら下りぬるが、其の目覺しき事、筆の及ぶべきにあらず。

李太白　支那唐時代の大詩人。

輕舟云々　「朝に辭す白帝彩雲の間。千里の江陵一日に還る。兩岸の猿聲啼いて住らず。輕舟既に過ぐ萬重の山。」（唐詩選）

巫峽　支那湖北巴東縣の西に在る。長さ約百二十粁。支那三峽の一。

渡より下つ方は、兩山けはしく峙ちて、峯は頭の上に臨み、流れ殊にせまりて細く、怪巖峨々として屏風を疊めるが如く、壁を附けたるが如く、龍の騰るが如く、獅子の踞るが如し。或は雜樹影茂れる中に入るかとすれば、松杉森たる岸に臨む。或は山吹の散りかゝりたる、躑躅の咲き揃ひたる、山櫻の己が梢とあらはれ出でたる、千景萬色眸をめぐらすに從ひ、兩山たゞ走るが如くにして、李太白が「輕舟既過萬重山。」と詠ぜしも、かゝる境にやと思ひ出でらる。彼の巫峽の急流は唐土第一にして、舟の下る事疾鳥迅雲も及ばずと云ふも、いかで是には過ぎん。予も興に入りて一絶句を作る。

東武　江戸をいふ。

程なく八代の井手といふ里に着きぬ。誠に舟中の快き事今も忘れ難し。日向より求麻に入りしも、かねて聞きつる急流を船にて下るべき爲なりけるが、日頃の望足りていと嬉し。

求麻の地は極く深山の中にて廣大の平地なり。別に一世界の如く、仙境ともいふべし。他國に出で入る路、日向の嘉久藤口と此の求麻川筋と二道のみなり。此の川の傍らに山路あれども、絶嶮にて殊に細し。されば相良侯にも、東都御參勤の時は、此の川を船にて下らるゝとなり。家中の面々も皆船なり。誠に數百里の海上をへて東武に出づる事なれば、家中の人々も、其の妻子・親友など、此の

川端に出でて見送りの時、殊にあはれなる事なり。其の時に船の纜を解くやいな、陸より船の中の人に水をかくる事なり。舟の人々笠をへだてて水を防ぐ。此のまぎれに、急流の事なれば數十町下り過ぎて、涙をそゝぐひまなく、はや見送の人影を見うしなふ事なり。予が發足の時も其の如くなりき。誠につきぬわかれに、落ちくる涙せきかねて、取る手さへ放ちかねたるに、水をそゝぎて船を飛ばす。陸地のわかれと異にして、物いひかはすひまもなく、速にてよけれど、又更に心ぼそくあはれなり。

（西遊記）

夏目漱石
名は金之助。英文學者。小說家。東京市の人。大正五年歿、年五十。

二 吾輩の運動

夏目漱石

主人の庭は竹垣を以て四角にしきられてゐる。縁側と平行してゐる一邊は八九間もあらう。左右は雙方とも四間に過ぎない。垣巡りといふ運動は、この垣の上を落ちないやうに一周するのである。これはやり損ふ事もまゝあるが、首尾よくゆくとお慰みになる。殊に所々に根を燒いた丸太が立つてゐるから、休息するに便宜がある。今日は出來がよかつたので、朝から

夏目漱石

晝迄に三返やつて見たが、やる度にうまくなる。うまくなる度に面白くなる。たうとう四返繰返したが、四返目に半分程巡りかけたら、隣の屋根から烏が三羽飛んで來て、一間ばかり向うに列を正してとまつた。これは推參な奴だ、人の運動の妨げをする、ことにどこの烏だか籍も無い分際で、人の塀へとまるといふ法があるものかと思つたから、「通るんだ、おい退き給へ。」と聲をかけた。眞先の烏は此方を見て、にや〳〵笑つてゐる。次のは主人の庭を眺めてゐる。三羽目は嘴を垣根の竹で拭いてゐる。何か食つて來たに違ひない。吾輩は返答を待つ爲に、彼等に三分間の猶豫を與へて、垣の上に立つてゐた。

烏は通稱を勘左衛門といふさうだが、成程勘左衛門だ、吾輩がいくら待つても、挨拶もしなければ、飛びもしない。吾輩は仕方が無いから、そろ〳〵歩き出した。すると、眞先の勘左衛門がちよいと羽を廣げた。やつと吾輩の威光に恐れて逃げるなと思つたら、右向きから左向きに姿勢をかへただけである。この奴、地面の上ならその分に捨て置くのではないが、如何せん只さへ骨の折れる道中に、勘左衛門などを相手にしてゐる餘裕がない。といつて立ちとまつて、三羽が立退くのを待つのもいやだ。第一さう待つてゐては、足がつゞかない。先方は羽のある身分であるから、こんな所へはとまりつけてゐる。從つ

綱―綱
障碍物

て氣に入れば、いつ迄も逗留するだらう。こつちはこれで四返目だ。只さへ大分疲れてゐる。況や綱渡りにも劣らざる藝當兼運動をやるのだ。何等の障碍物がなくてすら落ちないとは保證が出來ないのに、こんな黑裝束が三箇も前途を遮つては、容易ならざる不都合だ。愈〻となれば、自ら運動を中止して、垣根を下りるより仕方がない。面倒だから、いつそ左樣仕らうか。敵は大勢の事ではあるし、殊には餘りこの邊には見馴れぬ人體である。嘴がおつに尖つて、何だか天狗の申し子のやうだ。どうせ質のいゝ奴で無いに極つてゐる。退却が安全だらう、餘り深入りをして、萬一落ちでもしたら、猶更恥辱だと思

烏合の衆
据ゑ。
疳癪

つてゐると、左向けをした烏があはうといつた。次のもまねをして、あはうといつた。最後の奴は御丁寧にも、あはうあはうと二聲叫んだ。いかに溫厚なる吾輩でもこれは看過出來ない。第一自己の邸内で、烏輩に侮辱されたとあつては、吾輩の名前にかゝはる。名前はまだ無いからかゝはりやうが無からうといふなら、體面にかゝはる。決して退却は出來ない。諺にも烏合の衆といふから、三羽だつて存外弱いかも知れない。進めるだけ進めと、度胸を据ゑて、のそ〳〵歩き出す。烏は知らん顏をして、何か御互に話をしてゐる樣子だ。愈〻疳癪に障る。垣根の幅がもう五六寸もあつたら、ひどい目にあはせてや

るんだが、殘念な事にはいくら怒つても、のそ〳〵としか歩かれない。漸くの事、先鋒を去る事約五六寸の距離迄來て、もう一息だと思ふと、勘左衞門は申しあはせたやうに、いきなり羽搏きをして、一二尺飛び上つた。その風が突然吾輩の顏を吹いた時、はつと思つたら、つい踏み外して、すとんと落ちた。「これはしくじつたと、垣の下から見上げると、三羽とも元の所にとまつて、上から嘴を揃へて吾輩の顏を見下してゐる。圖太い奴だ。睨めつけてやつたが、一向利かない。背を丸くして少々唸つたが益〻だめだ。俗人に靈妙な詩の意味がわからぬ如く、吾輩が彼等に向つて示す怒の記號も、何等の反應を呈出しない。

唸る

西行云々　西行法師が諸國行脚の途次、鎌倉で將軍頼朝に召出されたとき、猫の形した銀製の火取をもらつた話。

考へて見ると無理のない所だ。吾輩は今迄彼等を猫として取扱つてゐた。それが惡い。猫ならこの位やれば、確に應へるのだが、あいにく相手は鳥だ。鳥の勘公とあつてみれば致し方が無い。實業家が主人苦沙彌先生を壓倒しようとあせる如く、西行に銀製の吾輩を進呈するが如く、西鄕隆盛君の銅像に勘公が糞をひるやうなものである。機を見るに敏なる吾輩は、到底だめだと見て取つたから、綺麗さつぱりと緣側へひき上げた。（漱石全集）

猫（夏目漱石筆）

野邊地天馬
名は三右衛門。著述家。岩手縣の人。明治十八年生。

エヂソン
トーマス＝エヂソン。米國オハイオ州のミランに生る(西紀一八四七―一九三一)。

ヒューロン
アメリカ合衆國ミシガン州ヒューロン湖畔に在る都會。

一三　發明家エヂソン

野邊地天馬

此處はグランド＝トランク鐵道の終點である。汽車は轟然として停車場の構内に入つて來た。驛夫は強い聲を絞つて、ヒューロン、ヒューロン。」と、呼び立てる。「サンドヰッチ、サンドヰッチ。」「煙草にマッチ、煙草にマッチ。」様々の賣聲が雜然として騷がしく聞える。其の澤

エヂソン翁夫妻

健氣

山の賣子の中に、賣れ殘りの新聞紙を抱へて居る少年がある。顏の丸い、眼のぱつちりとした、見るから氣持のよい少年である。此の時少年は漸く十一歲、健氣にも家計の幾分を助ける爲、列車内の新聞賣子となつて居るのだつた。此の少年こそは實に後の大發明家トーマス＝エヂソンだつた。

エヂソンは、小學校では極めて成績が惡く、其れに腕白だつたので、教師は其の母に退學を勸めた。負けぬ氣の母は卽座に彼を退學させて、自ら之を教育した。彼は九歲に過ぎなかつたけれども、母の熱誠によつて、次第に讀書に興味を覺えるやうになり、かうして將來見込のない

南北戰爭（西紀一八六一―一八六五）保護貿易の主張と奴隷制度禁止とを發端として起つた戰爭。

愚鈍兒と看做された彼の頭腦も啓發され始めたのだつた。

彼が新聞賣子となつた頃、恰も好し、米國は南北戰爭の最中だつたので、戰況を知らうとする人々は爭うて新聞を買つた。彼が毎朝かゝへて行く大束の新聞は殆ど賣り切れる程だつた。そこで、彼は、唯單に賣子をするだけでは面白くない、寧ろ自分で新聞を作つて賣つて見たいと考へて、新聞發行の計畫を立てた。年齡わづかに十五歲の少年に、もとより大規模のものの出來よう筈はないが、種々苦心して機械・活字其の他の道具を整へ、これを列車内の一隅に備へ付けて、其處を編輯室とも發行所とも

啓發

した。

新聞の名は「グランド・トランク週報（ウイクリー・ヘラルド）」といひ、毎土曜日の發行だつた。幸ひ此の少年記者の新聞は好評を博し、乘客は興味を以てこれを購讀した。かれは此の仕事をしながらも、一方母によつて啓發された勉强を止めなかつた。其の編輯所には電氣に關する書籍や、實驗用の機械を備へ付け、營業の傍ら、常に研究を怠らなかつた。此の堅忍不拔の精神は、將來彼をして一千餘種の發明を爲さしめたのだつた。

所が、意外な打擊が彼の上に落ちて來た。或日、列車内で化學の實驗をしてゐた所、列車の動搖によつて、棚の上

に置いてあつた燐素の壜が下に落ちたので、そこらは一面の火となつた。彼は驚いて飛び上り、上衣を脱いで消し止めようとしたが、到頭車掌に見付かつた。車掌は怒るまいことか、矢庭に「此の野郎、途方もないことをしをる。」と、拳を固めて擲りつけ、機械や活字を手當り次第に投げ棄てた。あはれ、此の椿事の爲に、彼は一耳を傷ひ、週報社は全滅の厄に遇つた。けれども彼は屈しなかつた。再び機械を集め、自宅で新聞の發行を續け、又化學の實驗をも繼續した。彼は失敗の爲に挫折するやうな心弱い少年ではなかつた。

或日、彼は例の通り新聞を賣る爲に列車に乗つた。そ

クレメンス驛　アメリカ合衆國ミシガン州デトロイト市の北。

危―厄

して、クレメンス驛に着いた。折しも、「危い、危い。」と、叫ぶけたゝましい聲がする。何事かと驚いて見廻すと、線路の間に小さい子供が遊んで居る。そして、汽車は今疾風のやうに駛つて來て居る。彼は忽ち身を躍らして其の危地に飛び入り、難なく子供を救ひ上げて、其の父に引渡した。其の父は涙と共に彼の手を握つて、其の親切を謝した。其の人は電信技師だつた。

此の縁故によつて、彼は、此の技師に就いて電信の技術を習ひ、遂にヒューロン停車場の電信技手に採用され、一箇月二十五弗の俸給を受けることになつた。此の時僅に十六歳だつた。併し、彼は模範的の技手ではなかつた。

彼は當時既に發明家たるべき素質を現し、機械的に動くよりも、寧ろ機械を案出しようとする傾向を有つてゐたので、事務家としては優秀でなかつた。

其の後他に轉任したが、常に品行方正、純潔な青年として成長し、得る所の俸給に餘裕があれば、其れで書籍を購うて益〻研究に努めた。後ボストンのウェスターン＝ユニオン會社の技手となり、二十一歳まで留つたが、其の間、電信の速記法を考案し、送信自動器を發明し、國會議事堂などで使用すべき賛否表示器を發明した。

彼は更にニューヨークに行つたが、此の時嚢中一錢の蓄もなく、一人の知己もない巷に、饑と寒さに苦しみながら、職業を求めて彷徨した。たま〳〵某會社が窮境に陥つて工場を閉鎖し、其の善後策を講じてゐたので、幾多の職工は手を空しうして、善い解決のつくのを待つてゐた。これを聞いたエヂソンは、こゝぞ自分の抱負を實現すべき好機會と思ひ、破れ服を纏つたまゝ、大膽にも重役に面會を申し込んだ。重役は此の穢らしい青年を見て殆ど狂人視した。けれども、遂に彼の熱心に動かされ、試に彼を其の難事に當らせることとなつた。所が、彼の爲す所は極めて剴切で、快刀で亂麻を斷つやうに巧妙に處理したので、忽ち會社を悲境から救ひ出すことが出來た。會社は彼を月俸三百弗で技師に招聘した。これ、彼が名を

ボストン　アメリカ合衆國マサチユセツツ州の首都。

己—已—已

纏ふ

剴切

招聘

貢獻

爲す第一の階段だつた。

昨日は饑寒に苦しんだ一青年、今日は立派な紳士になつた。是に於て彼は再び發明に心を用ひ、先づ新式の印刷機を發明して、米國の印刷界に大なる貢獻をした。これが爲、彼は四萬弗の報酬を得たのだつた。次に彼は同一の電線によつて、同時に二重に、更に四重に通信するとの出來る電信法を發明し、更に進んで八重通信法をも發明した。此等は電信に要する銅線や勞力や通信時間等の經濟上、非常に大切な貢獻だつた。所で、更に彼をして一層大ならしめたものは電話機の完成である。これは從來とても發明されては居たけれども、實用上不完全

特許權

なものだつた。然るに、今日のやうに自由に通信することの出來る機械を案出した者は、實に彼だつた。

かやうに發明心に滿ちて居る彼は、更に電燈の發明をも企てた。當時電氣によつて點火する術が知られては居たが、まだ今日使用するやうな電燈はなかつた。其れは電球の製作が發明されて居なかつたからである。そこで、エヂソンは其の發明に苦心し、そして其の材料には日本の扇子の竹の纖維が、最も適良であることを發見した。彼は此の研究の爲、四晝夜の間殆ど寢食を忘れて試驗室を出なかつた。其の熱心は到底凡人の及ぶ所でない。そして、此の發明は一八八〇年特許權を得たが、これ

惹起

畢竟

些事

に由つて世界の燈火は一大革命を惹起した。これ實に彼が三十三歳の時であつた。

次に彼が發明したのは蓄音器であるが、これは殆ど偶然の發明だつた。つまり電話機の振動に由つて思ひついたのだつだ。如何に偶然だとはいへ、畢竟不斷の周到な注意が、かゝる些事によつて大發明をなすに至らせたものである。かやうに、彼が注意と熱心とに由つて發明したものは屈指に暇がなく、其の數は既に一千餘種に上つて居る。あの活動寫眞なども亦其の一つである。

彼は幼にして、愚鈍視せられ、貧窮の中に人となり、東西に流浪したにもかゝはらず、遂に大なる功を成した。これ蓋し終始一貫努力の二字に生きたからである。彼は自ら、「予は十五年間毎日平均二十時間づつ仕事をした。」と、言ひ、また「予は蓄音器をのぞくの外は、一も偶然に發明したものはない。」と、言つた。これを以て見ても、彼が如何に努力の人であるかを知ることが出來る。幼年時代の遲鈍かならずしも失望すべきでない。たとひ牛の歩みは遲くとも、遂には千里の道を行くではないか。

（近代偉人物語）

額田六福
文藝作家。岡山縣の人。明治二十三年生。
木村重成
豐臣秀頼の臣。長門守と稱した。元和元年(一六一五)戰死、年二十一。
慶長十九年
紀元二二七四年。
大阪冬の陣
誓紙

一四　木村重成

額田六福

慶長十九年、大阪冬の陣の時、城中の將士が勇敢に戰つたので、城は容易に落ちさうもなかつた。そこで德川家康は阿茶局を淀君の許に遣して、僞つて和睦を申し込んだ。眞田幸村・木村重成・後藤基次・長曾我部盛親などの勇士達は、一致してこれに反對したけれども、恐しい戰を眼の前に見て怖氣のついた淀君は、どうでも和睦するといひ張つた。そして諸將を出しぬいて今後決して再び戰爭はせぬといふ互の誓紙に血判をすることまで約束してしまつた。

もう何事も終りである。この上は立派に家康の血判を取つて、大阪方の威勢を落さぬやうにするより外はない。しかし、何十萬といふ敵軍のまつたゞ中へ一人で乘込んで、しかと家康が血判をする樣子を見定め、さてその誓紙を受取つて來るのは實に容易ならぬ難事である。

「使者は誰にしよう。」と、さま〳〵評議の末、長門守がよからうといふことに衆議一決した。

「いや、拙者などに何として……。」

「重成は一應斷つたが秀頼からもぢき〳〵に「頼む。」といはれたのでたうとうお受けした。二十歳の重成はもう死ぬ覺悟を定めたのであつた。」

茶臼山　大阪市天王寺區に在る丘陵。今、天王寺公園の一部となつてゐる。

井伊直孝。本多忠信。大久保忠教。榊原康政。綺羅星

重成は十二月二十二日の朝、手水を使つて恭しく豐太閤の靈に祈り、新しい烏帽子・直衣を着け、悠々と白馬に跨つて、茶臼山の家康の本陣へ向つた。副使の郡主馬と、淀君の妹の常高院とが隨つた。やゝ城を離れると、もう德川方の陣所で何萬とも知れぬ將卒が、槍や刀を林のやうに立て連ねておどかすかのやうに道の兩側に並んでゐる。しかし重成は微笑を含んだまゝ通り過ぎた。

茶臼山の本陣は一層警戒が嚴しかつた。井伊・本多・大久保・榊原などの勇士達が、綺羅星のやうに並んでゐる。けれども重成は眉さへ動かさず、さながら無人の境を行くやうに、平然と家康の前へと進んだ。

「あいや大阪の御使者。」

餘りにそれが心憎かつたので井伊掃部守は呼び掛けた。

「拙者は井伊掃部守でござる。お見知りおかれい。」

太い聲で威壓するやうにいつた。

重成はじろりとその方を見やつた。見やつただけで、言葉一つ返さなかつた。

「拙者は大久保彦左衞門ぢや。」

重成はもう見向きもしなかつた。そして、つと辷るやうに家康の前一二間ほどの處まで進んだ。それはあまり近かつたので、

色めく

「あいや長門殿それはあまりに無禮でござらう。」
本多佐渡守は、思はず刀の柄に手をかけて呼び止めた。
「すはつ。」とばかり、並みゐる諸將も一度に色めき立つた。けれども重成は見返りもせず家康に向つていつた。
「いざ、誓紙御血判頂戴仕る。」
「むゝ。」
家康はじつと重成を見詰めてゐたが、やがて硯を引寄せて、すら〳〵と誓紙を認め、小刀を拔いて小指の腹に刺して血判をした。阿茶局は恭しくそれを捧げて重成に渡した。
「はゝつ、有難く頂戴仕る。」

凄愴の氣

重成は恭しく受取つた。そして一通りその文言を默讀したが、やがて最後の血判の處まで見て行くと、きつと顏を擧げて家康を見つめた。
「恐れながら、御血判の血が薄くて、見えかねまする。」
と言つて、阿茶局に突つ返した。
「何つ。」
さすがの家康もさつと顏色を變へた。諸將達はいふまでもなかつた。雨となるか、嵐となるか、凄愴の氣があたりをこめた。
「いや、『御判少々見えかねる。』と長門守が申します。恐れながら、もう一度押直し下さりませ。」

それと見た常高院は女だけに優しくいつた。それで家康も心が融けたと見えて、

「どれ〳〵。なるほど。年が寄るとどうも血の氣が薄くて困る。」

と、呟きながら改めて指を切つて、しかと判を押しかへて重成に渡させた。

「有難う存じます。」

重成は改めて厚く禮を述べ、誓紙を手箱に入れて、家康の前を下つた。そして、先刻の勇士達が並んでゐる處へ來て、

「最前は秀頼公の名代ゆゑ失禮仕つた。無禮の段平に

呟く

ゆゑ。

御容赦下されい。」

と、禮儀正しく詫びた。

「や。」

徳川方の諸將は先を越されて急に返事も出來なかつた。やう〳〵その中の伊那筑後守が、

「御念の入つた仰せ、匆々お通りめされい。」

「御免。」

重成はにつこり笑つて悠然と式臺から馬に跨つた。

「あゝ、健氣な若武者だ。秀頼公はよい家來を持つた。」

家康は後でさういつて、心の奥底から重成を褒めそやした。

容赦

悠然

式臺

村井弦齋
名は寛。小説家。愛知縣の人。明和二年歿、年六十五。

滋賀の山
滋賀縣(近江國)滋賀郡滋賀村の山。北は比叡山から南は長良山・逢坂山に連る。

凜冽
辛崎
滋賀郡下坂本村の大字。辛崎の松は八景の一。

堅田
同郡に在る。堅田の落雁は八景の一。

比良
同郡木戸・小松二村の西の山。海拔一一七四米。比良の暮雪は八景の一。

一五　滋賀の山越

村井弦齋

「雪ならば幾たび袖を拂はまし、花の吹雪の滋賀の山越。」

それは彌生の春の頃、櫻狩して行く道の眺めも飽かぬ旅なれども、これは習はぬ冬の旅、花の吹雪のそれならで、霏霏たる雪は路を沒し、凜冽たる風は膚をつんざく。辛苦のうちに滋賀の山を打越ゆれば、滿目蕭條たる湖上の風景。辛崎の松は暮靄朦朧の間にかくれて、堅田に落つる雁の聲のみ寒く鳴きわたる。

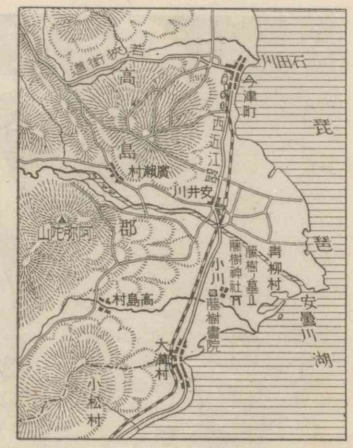
見渡せば白雪皚々たる比良の峯、今より此の山路にかからば、山中にて日は暮れん。疲れし足の進み難きに、坂

坂本
滋賀縣に在る。今坂本村と下坂村とに分れる。

我が故郷
高島郡小川村。

藤太郎
中江藤樹の幼名。

本の邊りにて宿りを求めんかと、獨旅の少年は前路を睨んで暫く湖畔に立ちたりしが、稍ありて思ひ返し、彼の山を越ゆれば我が故郷、今一息にて母君の許に着くなるに、何とて空しく此處に留らん。夜にてもあれ、朝にてもあれ、家に歸るを得ば疲れも厭はじ、いで〳〵心を取直して、今宵の中に此の山を越えんものをと、心を取直し、再び足を踏みしめて、薄暗き山路にこそはかゝりけれ。



痛はしや藤太郎、母に會ひたき一心より、踏みも習はぬ山路を、杖に縋りて唯一人、辿り〳〵て行く道の、岩に躓き、

寂莫

木の根に倒れ、血さへ足より流れ出で、道の邊りの雪を紅に染めながら、尚も心を勵まして、風雪の中を登り行く。

雪中の藤太郎

軈て日は暮れたり。闇の夜ながら雪明りに路は見ゆれど、彌增す寒さは骨に徹りて手も足も凍るばかり。寂莫たる滿山、耳に答ふるものとては、閉ぢし氷の下潛る細谷川の水の音、杉の枯葉を鳴らす風、或は積雪梢を壓して、枝折れ雪の落つる響なんど、かすかに物凄く聞えて、恐しとも

悲しとも譬へん樣なし。斯かる難所と知りもせば、麓にて一夜を明かししものを、旅馴れぬ身の悲しさに、足に任せて此の深山路へかゝりしが、今は足疲れ身體凍りて、先へも出でられず、後へも戻られず。藤太郎は進退谷まりて、半ば死せるものの如く、松の根方に打倒れたり。起きも上り得ず、降る雪を恨めしげに眺めてありけるが、腹は次第に饑を感じて、寒さは一入身に沁みわたり、何時しか眠るともなく死ぬともなく、前後も知らずなりにけり。

やゝありて、耳許に人の呼ぶ聲。かすかに眼を開けば、身は辻堂の緣に在り。我を呼びしは年老いたる一人の僧なりけり。僧の傍らには小牛の如き黑犬一頭、おとな

しくひかへ居り、縁の前にはたき火僅に殘れり。あはれ藤太郎は、危くも凍死すべかりしを、幸に此の犬に搜し出され、此の老僧の情にて漸く助けられたりしなり。

懷しの故郷や、藤太郎は昔覺えし山川・草木を目の前に見て、忽ち足の疲れも打忘れ、路を急ぎて我が家の方へ向ひけり。夜は漸く明けたれども、雪空の寒さに閉ぢられてや、道々の家はまだ多く起き出でず。彼の家は我が友の家なりけり。此の家には我に優しき老人ありなどと、昔の事を想ひ出て、そゞろにあはれを催しつゝ、しばらくにして我が家の前に來れり。

見れば、衡門舊に依つて立ちたれども、半ば雨に朽ちてまた昔日の觀に非ず。柱も傾ける所あり、築地も崩れたる所あり。前庭の古松、刈る人無ければ枝繁り、修竹一叢思ふまゝに根を延ばししと見え、彼方此方に生ひ茂りて雪に堪へざる風情あり。玄關の戸は未だ開かず。母人は未だ起き出で給はぬにやあらんと、築地の陰より内に入つて、勝手の方を見れば、車井戸の軋る音、さも寒げに聞えて、何人か水を汲めり。姿は確に母なる人、藤太郎は忽ち胸ふさがりぬ。昔はあまたの男女を召使ひて、勝手などに出でられしことなき母様が、此の雪の朝の寒空に、自ら車井戸の水を汲み給ふか、情なしと、沸き出づる涙止め

あへず。「急ぎ車井戸の側に駈け行きて、後ろより其の袂を惹き、「母様、私が汲みませう。」と涙ながらに取りすがる。

事の不意なるより、母なる人は驚きて振返り、「誰ぢや。おや、藤太郎。どうして此處へは。」藤太郎は細き聲、「はい、母様の御手助を致しに參りました。お話は後で申し上げますから、先づお家へお入り遊ばせ、あれ、お頭髪へ雪が。」と孝子の眞情、片時も母を此の雪中に立たしめざらんとす。母は車井戸の綱を確と握りしまゝ石の如く立ちたるまゝ、「祖父様とでも御一緒か。」「いゝえ、唯獨りで。」母は聲を勵まし、「祖父様が獨りそなたをお出しなされたか。」「いゝえ、濟まない事とは思ひながら祖父様には知らせず

に參りました。」母は眉を揚げ、「えつ、なぜそんな事を。」——颯と吹き來る朝嵐に、地上の雪はくる〳〵と捲き上げられて、横に二人の顏を撲つ。母はきつとして動かず。藤太郎は何事か言はんとして、顏を揚げしが、ふと母の足を眺めて、「おや、御足が切れて血が——おゝ、これこそ皸で御座いますか。」と俄に斷腸。母の疵を見るは、我が身の背に白刃を加へらるゝよりも、痛はしき心地して、忽ち懷中より、かの靈藥を取出し、「母様、これをつけて御覽遊ばせ。」と足許に進み寄る。母は急に足を引きて怒の聲、「足なぞは、どうでもよい。なぜそなたが歸つたか、其の譯をお話しなさい。」藤太郎は、取付くすべもなし。「然らば、家へ入

りまして申し上げます。」母は頭を振り、「いゝえ、此處で聞きませう。聞かない内は滅多に家へ入れません。」

藤太郎は、母を思ふ一心に遙々歸り來りし次第を物語りぬ。母は我が子のやさしき心根に惹き入れられそゞろに涙に咽びしが、忽ち思ひ返しけん、わざと言葉を勵まして、「これ藤太郎、そなたは此の母の言葉を忘れましたか。そなたを祖父樣にお賴みした時、一旦國を出たからは、天晴れ立派な人にならぬ中は、決して中途で歸るなと、あれほど堅く言ひ聞かせた事を忘れましたか。此の母が難儀を忍ぶのも、唯そなたを立派な者にしたいばかり。立派な者にもならないで、家に居て手助をしてくれたとて、

大洲　愛媛縣喜多郡大洲町。

何のそれが嬉しからう。一人で來たものなら、一人で歸れぬ事はあるまい。母は再び會ひませぬ。其の足で直ぐ大洲へお歸りなさい。」

餘りの事に、藤太郎は默然として言葉も出でず、力拔けして雪の上に跪きぬ。母は其の失望せる樣子を見て、痛はしさ哀れさ胸に滿ち、斯くまで我が身を思うて來りしものを、――百里の道の獨旅、定めて憂き事も辛き事も多かりしならん。――せめて一日なりとも家に入れて、旅の疲れを休めさせんかと、恩愛の情に心も亂れんとするを、忽ちにしてまた思ひ直し、なまなかに弱き心を見せなば修業の邪魔、獅子は子を千仞の谷に落すと聞くものを。

「藤太郎、そなたは母の言ふ事が分りませぬか。」と強くは叱れど聲は沾(うる)みぬ。

藤太郎は落つる涙を拭ひつゝ頭を垂れしまゝ、かすかなる聲にて、「はい、分りました。」「それならば今から歸りますか。」藤太郎は悲しき聲、「はい、歸ります。」と、素直(すなほ)に言ふ。母は素直に答へられては、なほさら腸のしぼらるゝ思ひ。母は遂に堪へ兼ねて忍び泣き、袖かみしめて聲を呑む。

藤太郎は屹として立上れり。「母様、此の藥は皸(ひび)の妙藥で、世に得難い品、これ差上げたいと、わざ〳〵持つて參りましたもの。これだけはお取りなされて下さりませ。」と新谷(にひや)にて得し妙藥を母の前に出す。母は快く「おゝ、そ

新谷　大洲の北約八粁。

なたの志、これだけは受けませう。」と手に取らんとて下を向く。藤太郎は渡さんとて上を向く。見合はす顏、互の眼には涙一杯。

母は恥かしと、じつと耐ふる心の苦しさ。子は堪へざりけん、藥を手より取落してうつむけば、雪の上にほろほろと落つる涙。

雪はなほ霏々として寒風に飛べり。母が汲み置きし水を見れば、いつの間に張りけん、上は一面の薄氷となれり。藤太郎は遂に心を勵まして、泣く〳〵我が家を立出でたり。見送る母、見返る子。滿天の風雪路悠々。

（「近江聖人」に據る）

大町桂月
名は芳衛。文章家。高知市の人。大正十四年歿、年五十七。

卑見

一六　史傳を讀むべし

大町桂月

青年はいかなる書物を讀むべきかとの御問に對し、卑見左に申し述べ候。

人は何人も摸擬性と感染性とを有し居り候。而して一生中、この二性の最も熾んなるは、少年時代、若しくは青年時代に候。どちらかと申せば、摸擬性は少年の方が強く、感染性は青年の方が強く候。君子に接すれば君子に感染し、小人に接すれば小人に感染し、豪傑に接すれば豪傑に感染し、小才子に接すれば小才子に感染するものに候へば、讀物の選擇もこれより割出さざるべからずと存じ候。

この頃の青年の一般の缺點は、歴史・傳記の知識に乏しき事に候。隨つて今の青年は、聖人・君子・英雄・豪傑・志士・仁人・大學者・大宗教家・忠臣・孝子などに接する事極めて少く、隨つて人物が小さくなり、眼界が狹くなりて、神經のみが尖り申し候。これ實に國家百年の大患に候。故に小生は大呼す、「請ふ、大いに史傳を讀まれよ。」と。

また一つ、今の青年に通じたる缺點これあり候。そは個人的若しくは孤立的といふ點に候。卽ち前代と絶緣して、己一代と思ふ考へが餘りに強く候。

積善の家には云云　易經に出てゐる語。

餘殃

隨つて重厚雄大の氣風なくして、こせ〳〵、ちよこちよこする小人物が多く候。これも史傳と親しまぬより起ることに候。史傳を讀まば「積善の家には餘慶あり、積不善の家には餘殃あり。」といふことがよく解り申すべく、行がおのづから重厚になり申すべく、人物もどつしりとして參り申すべく候。

申すまでもこれ無く候へども、國家の盛衰興亡は、全く人物の有無如何にこれあり候。盛んなる國も人物なければ忽ち衰へ、振はざる國も人物あれば忽ち振ひ申し候。我が國將來の發展に就いても、國民の人格を重厚雄大ならしむるが最大急務なりと確

卑怯

鄙吝

淨化

信致し候。人格を重厚雄大ならしむるには、史傳に親しみて偉人に感染するに若くは無しと存じ候。

聖賢の遺著は史傳を歸納したるものに候へば、史傳と共に常に座右に置き、日夕絶えず讀誦なさるべく候。さらば卑怯鄙吝の念次第に消えて、心が公明正大になり申すべく候。文學も古きものは精神の香高く、人の心を淨化致し候へども、近時の文學物は、動もすれば人を誤るもの多ければ、その選擇には深き注意を要すべく候。

（新學生訓）

一七　一年のをりく

「元日や晴れて雀の物語。」

老いたるも、若きも、麗かにさし上る初日影を仰ぎ見て、大御代の新年を賀ぎ合ふ。三箇日の朝なく雑煮の餅を祝ふも、古き風俗とてうれしく、七日の粥にも若菜つみけん昔おもほゆ。松の内もいつしか過ぎて、八日よりは學校の授業も始まる。今は年の中の最も寒き時にて、六日の頃より二月三四日の頃までを寒といふ。

寒明けて立春となる。立春とは東風氷を解く時なりといへど、東北地方の餘寒の嚴しさは、寒の中にも劣らず。

元日や云々
嵐雪の句。

松の内

立春の前夜は節分にて、家々に「福は内、鬼は外」と豆撒の聲の聞ゆる處今もあるべし。十一日の紀元節も過ぎて、梅の花も咲きそむれば、「梅一輪一輪ほどのあたゝかさ。」の句も想ひ出さるれど、「くまぐに」に殘る寒さや梅の花。」の感、はたなくはあらず。

豆撒

雛遊びは三月三日にする習にて、桃の咲く頃なれば、桃の節供ともいひしが、今の暦にては、花の蕾なほいと固し。三月六日は皇后陛下の御誕辰にて、この日を天長節に對へて地

梅一輪云々
嵐雪の句。

くまぐに云々
蕪村の句。

久節と申し奉るも、臣民の至情にこそ。三月十日は奉天占領の陸軍記念日にて、永く武勇なる軍隊の偉勳をしのばしむ。春分は二十一二日の頃にて、晝夜の長さ相同じ。俗に彼岸の中日といふ。卽ち春季皇靈祭の日なり。中日の前後各三日をあはせて七日の間を彼岸といふ。これは秋も同じく、秋の彼岸の中日は秋季皇靈祭の日に當る。春の彼岸はもみ種をひたす時、秋の彼岸は麥を蒔き始むる節なり。諺に「暑さ寒さも彼岸まで。」といへり。

早くも咲き出づる彼岸櫻をさきがけにて、四月は野も山も花の雲なり。四月二十九日は天長節なり。五月の二日または三日を八十八夜といふは、立春より數へて八

十八日目の心なり。苗代の苗漸く伸びて、青き疊を敷けるが如し。古人の句に、

苗代の色紙に遊ぶ蛙かな

五日は男の子の節供とて、鯉幟の空高く飜るも勇ましく、二十七日は日本海海戰の海軍記念日なれば、學校にて海戰の講話を聞くも感興多かるべし。

六月十一二日の頃より梅雨の節に入り、連日の鬱陶しさ堪へ難けれど、農家には大切なる雨なり。七月七日の夕は星祭の笹竹賑はしく、盆の精靈祭には、燈籠の火影もの哀はれなり。

八月八日の頃は曆にては立秋の節に當れども、處によ

苗代の云々
蕪村の句。

りては殘暑の暑さの暑中にまさること、餘寒の寒さの寒中より嚴しきが如し。立春より數へて二百十日、二百二十日の頃は暴風雨多ければ、農家はしづ心なし。いつしか新穀も實のりて、神宮の神嘗祭は十月の十七日ぞかし。十一月三日は明治節とて代々木の森にぬかづきて大帝の御偉業をしのびまつる民草多く、その頃、空美しく晴れて菊花の薫いよ〳〵高し。二十三日の新嘗祭も過ぎて後は、霜置き霰たばしりて、日も次第に短し。十二月の末殘る日數も數ふるばかりになれば、處々に年の市など立ちて、人々はまた新年を迎ふるに忙し。

親の用にたつ子幾人年の暮

（「高等小學讀本」に據る）

神嘗祭

新嘗祭

年の市

親の用に云々　太祇の句。

一八　君が代の歌

芳賀矢一

日本の國歌「君が代」はもと短歌から出で、これほど短い國歌は、どこの國にもない。形の短いばかりでなく、「君が代の長久」といふ御祝詞を述べただけで、その内容もまことに單純である。しかし、この短簡、この單純が、諸外國とは全く異つてゐる我が國體と國民性とを、十分に説明してゐるのである。

日本國の皇室は開闢以來の皇室である。この日本の國土は、我が皇室の君臨ます所と神代の昔から定つてゐて、皇室と國土とは決して離れないのである。外國の皇室にはさういふ例は一つもない。もと普通の國民

芳賀矢一　文學博士。元國學院大學學長。國文學者。福井市の人。昭和二年歿、年六十一。

の中から、或は德望により、或は權力により、次第に成り上つて王となり、帝となつたのであるから、歴史よりは皆ずつと新しい皇室である。國土はそのまゝで、皇室は幾度も變つたのである。それ故、國民の心にも、國土と皇室とを一つにして考へることは出來ない。皇室卽ち國家とは考へないのである。

かういふわけ故、外國の國歌では、どうしても國土や國家のことを歌はなければ滿足が出來ない。皇室の御繁榮を歌つただけでは物足りないのである。日本では、皇室の御繁榮は卽ち國家の繁榮であるから、皇室の御繁榮を歌ふだけで十分である。短い「君が代」の歌は、皇室の御

繁榮を歌ふと同時に、國家の繁榮をも含んでゐるのは勿論である。

「君が代」の歌に現れた思想、天皇の御代の長久を祈るといふことは、日本の上代から種々の文學にも現れてゐて、事新しくいふまでもない。皇室の方でも國民をおいつくしみ、になつて、皇室と國民との間に爭ひの起つたといふことは昔から絶えてない。皇室の御繁榮は卽ち國民の繁榮・幸福であるといふことが、日本人の信念である。それ故、別段に國民の繁榮や幸福を歌ふ必要はない。短い「君が代」の歌には、國家の繁榮と共に、國民の繁榮・幸福もおのづから含まれて歌はれてゐるのである。

橘　曙覽
姓は井手。歌人。福井縣の人。明治元年歿、年五十七。

一九　たのしみは

橘　曙覽

たのしみは珍しきふみ人に借り
はじめ一ひらひろげたる時

たのしみは妻子むつまじく打集ひ
かしらならべて物を食ふ時

たのしみは朝おきいでて昨日まで
なかりし花のさけるみる時

たのしみは心にかなふ山みづの
あたりしづかにみてありく時

たのしみは常に見なれぬ鳥のきて
軒とほからぬ樹になきし時

たのしみはそぞろ讀み行く書の中に
われとひとしき人をみし時

たのしみは神のみくにの民として
神のをしへを深くおもふ時

（曙覽全集）

相馬御風
名は昌治。小説家。新潟縣の人。明治十六年生。

二〇 雪國の春

相馬御風

雪國の民家

一時は一丈餘りもあつた雪がいつの間にか消えて、七十餘日目で私達は庭の黑土を踏むことが出來た。そこにはもう黃水仙のみづ〳〵しい色の芽が二寸ほども伸びてゐた。芍藥の赤い芽も一寸以上伸びてゐた。はこべや地しばりなどの雜草は

蕗のたう

いつしかすつかり起き直つて春の陽を吸つてゐた。庭隅にぽつ〳〵頭を並べてゐた蕗のたうはわづか二三日のうちにほぐれて花をのぞかせてゐた。どんなに深く積つた雪でも、不思議と地面との間が一寸も二寸も隙いてゐるもので、草々の芽はその間隙に春を待ちつゝ顏をのぞかせてゐたのだ。

雪の底に壓し伏せられてゐた庭のかへでも、雪の消えた當座は壓し伏せられたまゝの形でゐたが、この四五日の天氣つゞきですつかり起き直つて、枝といふ枝は日に日に大空の方へ太陽の方へと伸び上りつゝある。そしておのづから彼等の枝ぶりをなほし、全體の容姿をとゝ

容姿

のへつゝある。いふまでもなくそれは植木屋によつてつくられた元の容姿や枝ぶりとはちがふ。

しかし自然にとゝのつた樹木の容姿には、植木屋などの企て及ばない別趣の妙味がある。

潮風の荒い海岸の松の木や、雪の深く積る山地の樹木などに、私達は植木屋なんかの苦心慘澹してつくつた庭木や盆栽などよりも、遙に風情に富んだ容姿を見ることが少くないが、さうした天然の樹木の美しい容姿を見るたびに、私はそこに幾十春秋風雪と闘ひ、寒暑と闘ひ來つた彼等の雄々しさを感ずるのである。

たゝかれ、曲げられ、折られ、壓し伏せられつゝも、彼等は

象徴

雨の情、日光の恩惠を力に、いつしか自らの姿をとゝのへて來たのである。自然は一方に彼等に對して暴虐な敵であるが、他方にそれは溫かな慈母の胸である。山上に立つ老木の姿は、自然の暴虐に對する雄々しき闘ひによつて傷つきつゝも、生きぬいて來た勇者の姿であると共に、それは溫かな慈母の胸に抱かれて、あらゆる惱み、あらゆる痛みから救はれた愛さるゝ者の和やかな姿である。

折られたり、ゆがめられたり、矯められたり、伏せられたりした彼等の部分々々には、風雪とのいたましい闘ひの名殘は見えるが、それらを和らげとゝのへ、調和あらしめてゐる全體の容姿には、慈母の如き自然の愛が象徴され

惰性

てゐる。

私は永い冬の惰性から兎角まだ離れ得ないでゐる茶の間の爐邊に坐つて、日に〳〵姿をとゝのへて行く雪折れのひどい庭木を眺めながら、今更の如く一方に生命の力の強さを感ずると共に、他方にそれをいたはり力づけつゝある春の惠みの大きさに驚いてゐる。

畑には地面にへばりついたやうに雪に壓されてゐた麥が、日一日と起き上り、伸び立ちつゝある。秋のうちに芽を出してゐたゐん豆の苗も、やがては卷蔓の手を伸ばしはじめるだらう。雪國では麥踏みといふことをする必要はないが、南國ではわざ〳〵麥を人間の足で踏みつけるといふ。麥のやうに壓迫されるほど成長の良いものであるといふことは何としても面白い。

雪國の春の地面は、壓しつぶされてゐた草木の新たな起き上りと、成長との活舞臺である。永い間地上をおほうてゐた雪が消え、ほの〴〵と春の世界が展開されると、人々はいつとなしに永い陰鬱な冬をすごして來たことなんかけろりと忘れてしまふ。そしてひたすら春の歡びに浮れる。

「永い間あんなに深い雪の中にゐたんだけれど、何だか今になつて見ると夢のやうですね。」「いかにも、つい十日ほど前まで雪の上ばかり歩いてゐたんですが、それすら

遠い昔のことのやうな氣がするぢやありませんか。」

こんな風に私達はすつかりもう冬を忘れてしまつてゐる。これはひとり人間ばかりでなく、もつともひどく雪と暴風と寒さとにいぢめられてゐた木や草でさへも、いつそんな苦難に逢つたかといはぬばかりの朗らかな樣子で、春の陽を吸うてゐる。

冬中餌に困つてゐた雀どもまでが、少しのやつれも見せずに遊びまはつてゐる。

あのいかにも春を呼ぶやうな種賣の聲はまだ聞えないが、それも四月半ば近くになれば毎日のやうに聞かれるであらう。それにつゞいて金魚賣がやつて來る。飴

玄人ー素人

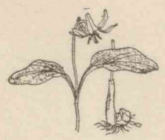
屋がやつて來る。よく町と村とをつなぐ畦道なんかで、小さなガラス鉢に四五匹の金魚を泳がしたのを、いかにも大切さうに手に提げて五歩に一度、十歩に一度のぞいて見ながら、町から村へと歸つて行く子供達を春の夕暮に見受けるが、それは何ともいひやうなくいぢらしいものである。

毎年四月の月の半ば以上、まだ雪の中で暮さなければならぬ山の村もあり、雪を掘りのけて苗代田をつくらねばならぬ村も少からずある。二尺も三尺も雪のつもつた廣場に舞臺をかけて若い衆が素人芝居を演じ、見物人は雪の上にわらむしろを敷いただけの座席に坐つて、終

日寒さも何も忘れて打興ずるといふ山の中の村もある。越後の春は何といつても晩い。空はすつかり春になつても、地上の雪は中々消えつくさない、雪の比較的早く消える地方でも、すぐそこまで眞白な雪の山を眺めながら、田をすき、苗を植ゑなければならぬやうなところが多い。

櫻も桃も四月下旬でなければ咲かない。蒲公英（タンポポ）の花盛りも四月の末から五月にかけてである。

「先生、花とつて來ました。」と叫んで、さも自慢さうに山の子供達が、村の學校の先生のところに第一に持つて來てくれる花は、片栗の花だといふ。山道ばたの崖の日あたりのいゝあたりに、逸早くところ〴〵土が現れると、そ



かたこ花

こにまづ咲く花はあのゆかしい紫のかたこ花であらう。見渡すかぎりまた雪におほはれてゐる中に、こどもたちが思ひがけなくこの花の咲いてゐるのを見つけた時の喜びのほども思ひやられる。

山の子供達が一刻も早く黑い地面を踏みたさに、わざわざ海岸に近い村や町に遙々出て來るといふ氣持も、毎年のことながら私はなつかしく思ふ。町では雪が消えたと聞くと、子供達は一里や二里の雪道を薪を背負はされて歩くぐらゐの苦勞は忍んでも、地面を踏む歡びを得たいばかりに出て來るのであらう。季節の推移に對しては子供がもつとも敏感である。

（砂に坐して語る）

河井醉茗
名は又平。詩人。
堺市の人。明治
七年生。

消え。

二　土の歡喜

河井醉茗

これがどうして消えるだらうと思はれた雪が
いつの間にか音もなく
大地の彼方に消えて行つた
あんなにひし〳〵と
きびしく築いた霜柱も
何處へか持つて行かれた
白くから〳〵に乾いてゐた街道も
茶色にうつぶしてゐた原野も

こらへ。

氣がゆるんだやうに
ゆるやかに胸をくつろげて
その間から
絹絲のやうな草や木の芽が
長い間こらへてゐた息をホツと吐く
やがてはのび〳〵とした土の歡喜が
太陽に向つて
地上一面に
あを〳〵と舞ひあがるであらう

（醉茗詩集）

三三　滿洲國の住み心地

上田恭輔

上田恭輔
ドクトル フィロソフィー。滿蒙研究家。元滿鐵社員。

長白山系
滿洲と朝鮮との境に在る山系。

海拉爾地方
滿洲國黑龍江の西部コロンバイル地方。

「滿蒙」と言ふと、多くの人が一望千里の大平原を想像する。併し、現に我が關東州租借地の如きは、遼東半島の尖端にある僅か三千五百平方粁の岩だらけの土地なので、海岸にだけ多少の平地があるのみである。右のやうに、奉天以南の遼東半島は、千山山脈が二重にも三重にも北から南に走り、武藏野ほどの平地すらない。併し、奉天以北になると、遙か東に長白山系を雲か山かと認めるだけで、西を見るとこれこそ一望千里、一物の視界を遮るものもないばかりか、更に洮南（タウナン）以西の地、或は海拉爾（ハイラル）地方、或は

新京城内

建設の新京

新京日本橋通

新京

滿洲の特異点

1、冬は五ヶ月地下二米迄結氷する
2、冬が交通運搬の活動期である
3、黄塵が高く上る（冬）
4、四季の交替する時が急である（月半ばも塵埃が舞う）
5、花の魁が杏、李で凡ての花が地より濃艶である（春）
6、晝と夜の氣溫の変化大
7、晝（夏）夜（冬）
8、書間の午前四時～午後八時迄
9、湿気少きため空が澄明で美しい
10、秋が最も好季節
11、朝晩涼しい（秋）
12、草木が一般に内地より大なり
13、特産物大豆
14、面積は内地の三倍、人口三分の一の密度
15、奉天以南北は一望千里の大平野
16、鉄道以外は殆んど通ぜない

揚子江　支那第一の大河。長さ五二〇〇粁。

ダイナマイト　爆發藥。

黑河の平原に立つと、將に天地は一眸の内にあつて、その偉大なる壯觀は、何とも形容すべき言葉もない。「揚子江の大を見ないものは、支那を知らないものだ。」と言ふが、それよりも「滿蒙の平原を見ないものは、大陸の何たるを解しないものだ。」と言はなければならない。

滿蒙の冬の天地は、山川草木あらゆるものが結氷する。その期間が凡そ五箇月。日本では常磐の綠を誇る松柏も凍えて黃色になる。だから、滿蒙では、滿目荒涼一點の綠色を見ず、西を見ても東を眺めても、雪と氷で、畑も二米位の深さまで岩石の如く固くなる。ダイナマイトでないと容易に穴も掘れない。雪は砂糖のやうに細かく、一

度降ると翌年五月までは解けず、河や湖や沼の氷は、その上に枕木を並べて鐵道を敷き、汽車を駛らせても大丈夫である。

この結氷時代が活動期であるから、よほど頑健なものでないと、滿蒙の天地には堪へられない。

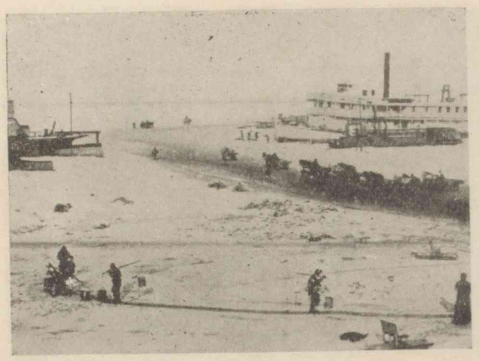
日本人の小學校の校庭には必ずスケート競技場があり、零下二十何度の酷寒の夜でも、煌々たる電燈の下でアイス=ホッケーに耽る青年男女が澤山ある。滿蒙百幾十萬方粁の地も、鐵道の外には路らしき街道

アイス=ホッケー

アイス=ホッケー　氷上の競技。氷滑りをしながら行ふホッケー。ホッケーは縦約九一・四米、横約五四・九米のグラウンド内で雙方十一人づつに別れた二組が約一・二米の先の曲つたステッキで一つの球を取合ひ、敵方のゴールへ球を打込みその數によつて勝敗をきめる。

もなく、牛馬や車輛を通ずる橋一つさへない。そこで結氷期を待つて交通・運搬の活躍が始まる。何千萬噸と稱する大豆その他の穀類が、或は橇、或は八頭曳の荷馬車によつて、北から南へと運ばれる。湖水の上でも、大河の上でも、個人の畑の上でも、勝手次第に往來する。それは盛んなものである。

松花江・遼河、及び鴨綠江を滑る橇の輸送に至つては、確に滿洲獨特の運搬法である。松花江の如く千何百粁とある長い河の上を辷つて、特産物



松花江の結氷

松花江　滿洲國に在る河。黑龍江の一大支流。長さ約一八〇〇粁。

遼河　滿洲國の大河。東遼河・西遼河の兩源が在る。西遼河は熱河省に發し、奉天省に入つて東遼河を併せ南流して營口の南で遼東灣に注ぐ。南滿洲の交通・運輸に寄與すること大。長さ約一六〇〇粁。

白髮三千丈
「白髮三千丈、緣ッテ愁似レ箇長。不知明鏡裏、何處ニ得ン秋霜。」
（唐の李白）

を輸送する荷馬車隊のためには、三十粁か五十粁毎に、臨時の宿屋が氷の上に開設される。暖國人の想像もつかない事柄であらう。

馬橇の輸送

日本の春の魁は、梅の花と鶯の初音である。滿洲では黃塵萬丈が起つて、始めて地上の氷や雪が解け、春の日の將に近きを知る。支那には「白髮三千丈」などと言ふ誇大な形容もあるが、滿蒙のこの黃塵だけは、萬丈は愚か靑天白日にしてなほ天地晦冥、一米前も見えず、晝の日中に電燈をつけることさへある。

越え。

柳絮云々
「柳絮飄ニ春雪、荷珠漾ニ水銀。」

梁
西紀五〇二年梁武帝蕭衍の建てた國。

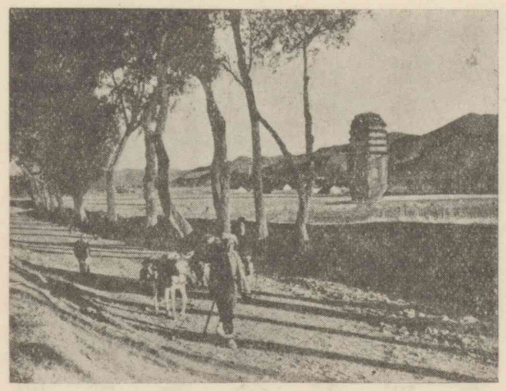
元帝
名は繹。支那六朝時代の梁の皇帝。

この黃塵萬丈に乘じて、明治三十八年三月十日、皇軍は露軍を追擊し、奉天城を占領した。この黃塵は玄界灘を越えて、遙か九州地方、或は宇都宮地方の空を掩うたことさへもあるから、驚かざるを得ないではないか。

四月の中旬になると、突如一夜にして地上に綠草が萌え出で次で菫や蒲公英が咲く。土筆が芽を出す。同時に楊柳の枝が靑くなる。「柳絮春雪を飄して、荷珠水銀を漾はす。」とは、梁の元帝の名吟として後世に傳はつてゐるが、楊柳の花の翩々として四散し、地に積つて雪かと思はれる美しい風景は、滿洲でないと見られない。

梅は盆栽以外にはない。春の魁に咲く花は、杏と李で

ある。梅花より濃艶であるが、惜しいかな馥郁たる梅花の香を缺く。杏・李の花の散らない間に、梨・林檎、次は櫻、最後は桃と、百花爛漫、草も木も一時に花が開く。殊に美しいのは、藤と胡藤の花盛りである。胡藤と言ふのは、アカシヤを詩的に和譯した名前で、僞槐のことである。



アカシヤの並木

五月の初旬に滿開となる。花には純白があり、淡紅があり、又淡青があり、ゴールデン・チェーンと言つて黃金色のものもある。初は露西亞人が滿洲に移植したもので、旅順や大連

ライラック
ぢんちやうげ。

の街路の並木に多い。櫻と藤は、大和男子が母國を偲ぶために、第二の故鄕へ日本から輸入した、懷しい憧れの花である。この他石榴・牡丹・芍藥、野生のライラックなどの美しさに至つては、日本の花も、到底及ばないほどの艶麗さを見せてゐる。滿洲は決して荒地ではない。

かくて南滿洲の春は、昨日まで氷に鎖された天地が、俄然として百花爛漫、あらゆる禽鳥の囀る光景に一變する。鶯も、雲雀も、杜鵑も、何もかもけたゝましく囀り、恰も小鳥屋の前に佇むやうな感じがする。北滿になると、春も秋もない。冬から夏へ、夏から冬へ一足跳びである。松葉牡丹が、地上に絨緞の如くに彩られ、玫瑰と呼ぶ紅白の野

哈爾濱
滿洲國吉林省の北西隅に在る都會。新京を距る二四〇粁のところ。

薔薇が、垣根に新裝を粧ひ、野に勿忘草や、茜草や、僅に十糎程の豆燕子花などが咲き亂れる頃は、早くも夏である。哈爾濱から北滿鐵道の沿線へかけては、漸く新綠になつたかと思ふと、五月の中旬には、既に氣溫が三十二度近くに昇り、毛衣を捨てるや否や、一躍して白服に白靴の世界と變る。

哈爾濱市街

何と言つても滿洲の新綠は美しい。氣候の乾燥するせゐであらう、各種の楊柳・樺・楡せる。

はもとより、蘇生した松柏の葉までが、鶯の羽のやうに美しい挽茶色に彩られる。洋畫家の憧れるのも決して無理はない。

暑氣の盛んな頃になつて、四十三度以上の高溫に昇ると、汗はどし〳〵蒸發して、身に纏ふ衣のびしよ濡れになることはなく、皮膚もさら〳〵して粘り着かない。だが、日光の直射は、焦げつくばかりに强烈である。

夏の朝は、四時の時計の音を聽くと、東の空が早くも白む。そして夜は八時近くまで明るい。夜の空のすがすがしさと、星の如くて大きいのと、大空に濕氣がないのとで、天は恰も青磁色をなしてゐる。六千年の昔に、メソポ

メソポタミヤ
太古の文明國。

タミヤで天文學の發達した理由が、滿蒙の夏の夜の大空を眺めて、いかにもと理解される。

遠く海を離れてゐる大陸の氣候は、日本人に思ひもよらない變化が多い。たとへば、北滿地方で日中は四十三度にも近い酷暑の夏の夜が、眞夜中の二時になると、毛皮の外套を羽織つて、それでも震へるほどの寒さに冷えることもある。また地に置く露の夥しきことを見ては、雨降らぬ蒙古の沙漠に雜草の繁茂する理由も成程と頷かれる。

蒙古の沙漠

一年に一回、七月の下旬から八月の中旬まで、ちやうど一箇月ほど雨が續く。日本の入梅のやうに、連日びしよびしよ降るのではない。豪雨とはかゝる雨を言ふのかと思はれるほど、勇壯極りなく、恰も空一面の大きい盥の水を一度にひつくり返したやうな勢で落ちるのである。息づく隙もないくらゐの大降雨で、市中の道路は忽ち河と化し、渾河・太子河のやうな巨大な河も一時に氾濫する。滿洲で、平常は一滴の水さへも見ない砂原の河床の上に、長い〳〵鐵橋が架けてあるのは、このためである。だが、幸にかゝる豪雨も二日とは續かない。忽ち降り忽ち青天白日となる。まことに男らしい雨である。我が關東

渾河　南滿洲の河。遼河の一大支流。

太子河　滿洲國奉天省に在る遼河の一支流。遼陽附近以下多少の舟運の便がある。

州租借地では、右の一年一回の雨を一滴も逃すまいと、各處の山間溪谷に、大規模の堰堤を築造して、幾つとなく貯水池を設けてゐるが、既に百萬の人口を支へるだけの上水の設備が成つてゐる。

四季を通じて、滿洲の秋は最上の好季節である。春のやうに黄塵萬丈の苦しみもなく、事實に於て天は高く馬は肥え、大空には一點の白雲を見ず、中秋の滿月を賞するには持つて來いの上天氣が續く。だが、惜しいかな、その良季の秋の日はまことに短い。北滿洲に行くと、秋は僅に二週間ぐらゐで、忽ち煖爐に親しむ世の中となる。しかし、朝鮮に近い安奉線沿道の深山幽谷の秋の紅葉は、燃

ゆる火焔のやうに美しい。萩は秋木と呼ぶやうに床柱になるくらゐの大木もある。女郎花も人間の背丈ぐらゐに高い。桔梗・撫子の花の濃艶華麗に至つては、到底濕つぽい日本の花の比ではないと思はれる。

かゝる秋草の美も、草むらに啼くあらゆる蟲の美音も、物質本位の支那人には毫も顧みられない。彼等は、蟬が鳴き止み蟋蟀が合奏を始めると、早速に農産物の收穫の用意に取りかゝるのである。

（新滿洲國寫眞大觀）

姉崎嘲風
名は正治。文學博士。東京帝國大學名譽教授。宗教哲學者。京都市の人。明治六年生。

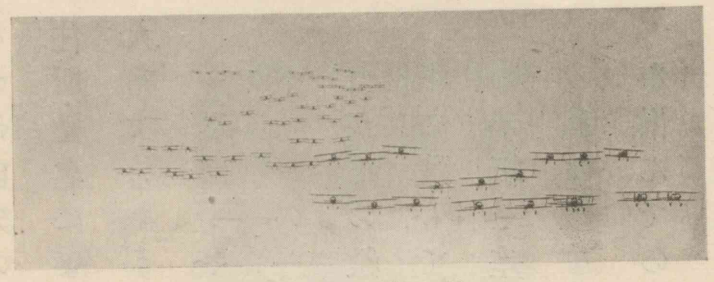
「罪を憎んで人を憎まず」

かゝ
関る　関係かある
抱る　気を取せる

二三　汝の母

姉崎嘲風

イギリスの一飛行士官が、敵の飛行機を射落した時のことである。彼は敵機の地上に落ちるのを見ると共に、それに乗組んでゐる敵兵のことを思ひ、敵の塹壕の前であるにも拘らず、敵機の跡を追うて着陸した。敵機は翼を折つて壊れ、乗組士官は地上に横たはつて倒れ、呼吸は已に絶えてゐた。敵ながら今まで空中に飛翔してゐたことを思ひ、物のあはれを覺えて、その死骸を片付けてやらうとして、胸のポケットの邊に手を觸れると、そこに堅い物がある。それを捜し出して見ると、一葉の寫眞で、そ



編隊飛行

れには「汝の母」と、書いてある。即ち今戰死したドイツ士官は、空中戰にも常にポケットに「汝の母」の寫眞を藏してゐたのである。イギリス士官はこれを見て一入あはれを催し、まづ敵の死骸を味方の塹壕に運び、再び機上の人となつて又一戰した。かくて武運めでたく安全に味方の戰線の後ろに歸つた。

その夜、イギリス士官はその日、射殺した敵とその老母とのことを思ひ、それにつけては、自分の身の上、かつは早く亡く

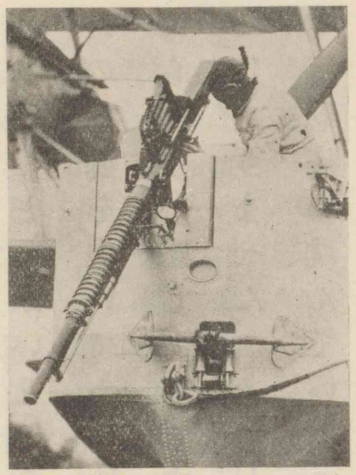
なつた自分の母のことを考へて、感慨に堪へず、敵士官の住所・姓名によつて、その母へ一書を送つた。その意味は大略次のやうであつた。

「私はイギリスの飛行士官です。今日、私は敵機たるドイツの一飛行機を射落して、一つの功名を立てましたが、その敵兵が死ぬまで母御の寫眞を大切にポケットに藏してゐたのを發見し、その母御たるあなたにこの手紙を差出します。

私はあなたの御子息を殺しました。しかし、御子息を憎んでのことでもなければ、また御子息の母御たるあなたのお悲しみを知らないでもないことは勿論で

す。たゞ戰爭といふ殘忍な仕事に於て、これは私の義務だつたのです。敵士官、卽ちあなたの御子息が、味方の陣地を空中から偵察して無事に歸られましたなら、その結果、味方は必ずやそれだけの攻擊を受けて、味方の兵何人かの生命はその爲に失はれたでせう。

この不幸を防ぐ爲、私は敵機を射落しましたが、その乘組士官の死骸に敬意を表し、それを取りかたづけようとする時、その人の母御たるあなたの寫眞を發見して、無量の感に打たれたので



移動式機關銃

す。

私は子供の時母に死に別れ、今でも母親のある人を見て羨ましく思ふのですが、その私が殺した敵士官には、あなたといふいとしの母親がゐられ、死ぬまであなたの寫眞を抱いてゐられたのを見て、私はじつとしてゐられない感じがします。御子息は已にこの世の人ではありません。あなたもこの知らせを得て、今頃はさぞ悲痛に沈んでいらつしやるでせう。御子息を殺した私が、あなたに手紙を差上げるのは殘忍だともお思ひでせうが、しかし私としては、あなたに對して、丁度自分の母に對するやうな親しい感じを、悲しみの中に

羨望
可愛、
「泣きがらゝ蜂」

も禁ずることが出來ません。私は御子息を殺しました。しかし、今私があなたの寫眞を前に置いて、あなたにこの手紙を書く時には、亡き御子息があなたに向つて話をしてゐるのか、また私が自分の亡き母に向つて手紙を書いてゐるのか、私には區別がつかず、筆先に涙がはら〳〵と流れるばかりです。

私が御子息を殺したのは、戰爭といふ殘忍な惡魔のしたことです。あなたも、亦亡くなつたあなたの御子息も、このことを思うて、私の罪を許して下さるでせう。そしてまた、御子息の亡くなつた代りに、私は一人の母を得たやうな思ひをしてゐることを察して下さるで

せう。今私の書くこの手紙は、御子息と私と二人の魂――殺された御子息と、殺した私との眞心――が一緒になつて書くのだと思つて下さい。もうこれ以上は何も書けません。涙で目は曇り、筆執る手も顫へて書けません。」

この手紙は、英軍の本營から中立國の手を經て、ドイツ國内の宛名の人に屆いた。一人の兒を失つた母が、これを讀んだ時の感じは、思ひやるさへ涙の種である。さて、この婦人は、數日の後、長い〳〵手紙を書いて、かの英國士官へ送つた。その大意は次のやうであつた。

「お手紙の着く前に悴の戰死は知つてゐましたが、その戰死の相手たるあなたの情深いお手紙を見た時の私の思ひをお察し下さい。通常ならば、あなたを悴の仇としてお怨み申すところですが、御述懷に接しては、その仇が反つて、悴の蘇生となつて、この母に手紙を寄せてくれたやうに思はれます。あなたが悴の懷にあつた私の寫眞に對して、亡き母御に對する心持がするといはれるやうに、あなたのお手紙は、私にとつては討死した悴の手紙としか思はれません。あなたは悴を殺したといはれ、また事實それに違ひないことは勿論知つてゐますが、殺すも殺されるも、ともに各〻の祖國の爲で、人としては何等の怨も仇もある理由のないこと

畢竟
結局
個人的
戦
国家的

結果に對して
直接の原因
間接の原因
縁

神振り合ひも多少の縁

は、お互に明白のことでせう。その怨もないものが互に殺さうとするのは、畢竟は戰爭の爲ですが、これについて私は何も申しません。たゞ仇といふべきあなたが私を母の如く思ひ、私にも亦あなたが死んだ忰の身代りのやうに思はれるのは、何たる不思議の因縁でせう。

私には三人の男子がありまして、戰死したのはその末子ですが、兄二人もやはり戰場に出てゐて、いつ弟と同じ運命に陷るか解りません。しかし、私は末子の戰死した爲に、あなたといふ新たな子を得ました。戰爭が濟み、平和の時が來、そして兄二人も無事に歸つて來

人情
義理

ましたら、私はあなたにこの家へ一度來ていたゞきたいと思ひます。二人の兄もあなたを弟と思つて迎へるでせう。その時にはあなたは死んだ忰とあなたと二人分の子として弟として、私の家庭にいつまでも滯在していたゞきたうございます。私はその日の早く來るやうに神に祈つてゐます。」

そして最後には、あの寫眞に書いてある通りに「汝の母」と書いてあつた。

（光　あれ）

坪内逍遙
名は雄藏。文學博士。英文學者。名古屋市の人。昭和十年二月歿、年七十七。

安宅
石川縣能美郡安宅町。

二四　安宅

坪内逍遙

時しも頃は春のはじめ、風まだ寒き北國路を、いたはしや義經は、兄頼朝の疑ひをうけ、奥州さして落ちて行く。主從僅に十二人、辨慶を先達に、山伏姿に身をやつし、日數程經て加賀の國、安宅の港に着きにけり。

（強意の助詞）

義「いかに辨慶、旅人等の噂によれば、安宅には特に關を設けて、山伏をきびしく取調ぶる由、いかにすべきぞ。」

辨「これはゆゝしき御大事なり。きつと、これにて御工夫あるべし。」

人々「いや〳〵、何程の事かあらん。たゞ打破つて御通りあるべし。」

笈

辨「いや〳〵、打破らんは易けれども、大事の前の小事なれば、なるべく穏やかなる手段をとりたし。」

義「然らば辨慶、ともかくもその方の工夫にまかせん。宜しく計らひくれよ。」

辨「畏つて候。まづ考へ出したることは、我等かく山伏に身をやつせども、包み難きは我が君の御品格なり。おそれながら暫く強力に御身をやつされ、御笠深く召され、我等の笈を負ひて、わざと後ろにさがつて御通りあれかし。さなくば忽ち見出され候はん。」

義「げに〳〵、これはもつともの事なり。」

東大寺
奈良市に在る、華嚴宗の大本山。聖武天皇の創立・勅願寺。

姿をやつし主從は、やうやく關に近づきて、通らんとすれば、關の役人富樫左衞門、

富「やあ〳〵、山伏。關なるぞ。名をなのれ。」

とぞ呼ばはりける。

辨「承つて候。これは南都東大寺建立のために、北陸道を勸進する山伏にて候。」

富「それは殊勝の事なれども、山伏なるからは、この關は通し難し。」

辨「して、そのいはれは。」

富「されば なり。頼朝・義經御不和により、義經殿には山伏と姿をかへて、奥州へ落ちらるゝ由。故に諸國に新關

を設けて、山伏をかたくとゞむるなり。一人も通し難し。」

辨「承つて候。しかし贋山伏をこそとゞめらるゝならめ。まことの山伏をとゞめ給ふいはれは候はじ。」

富「あらむづかし。論より證據なり。まこと東大寺建立の勸進ならば、勸進帳のあるべきはず。こゝにてそれを讀み上げられよ。某これにて聽聞せん。」

安宅之圖（寺崎廣業筆）

辨「何と、勸進帳を讀めとや。心得申して候。」

もとより勸進帳のあらばこそ。笈の中より有合せの卷物一つ取出し、勸進帳と名づけつゝ、卽智をもつて文を綴り、まことしやかに聲高々と、天も響けと讀み上げけり。

富「もはや疑ひは晴れて候。御通り候へ。」

富樫つく〴〵聽きすまし、

辨「かたじけなく候。」

げにや紅は園生に植ゑても紛れなし。後ろに從ふ强力を、富樫目早く見とがめて、

富「いや、暫く。その强力は通し難し。とゞまれ。」

と、のゝしりぬ。すは、我が君をあやしむは、一期の浮沈と

仰天し、皆一同に立ちとゞまる。

辨慶騷がず、そらとぼけ、

辨「やい、强力め。何とて早く通らぬぞ。」

富「いや、それはこなたよりとゞめたるなり。」

辨「そはまた何故。」

富「あの强力が姿、義經殿に似たるゆゑなり。」

辨「奇怪千萬、義經殿に似たりとや。しかいはるゝ强力めは一生の名譽ならんが、さりとては腹立たしや。今日のうちに能登境まで行かんと思へばこそ、强力やとひたるに、僅の笈を重げに負ひて、人々に後るればこそ、貴人かとも怪しまるれ。憎さも憎し、いで、懲してくれん。」

金剛杖をおつ取つて、さん〳〵に打擲(ちやうちやく)す。これはと驚く人々を、辨慶目にて制しとめ、なほも激しく打据うる。富樫やうやく疑念を解き、富「これは我等が誤なり。その強力には構ひなし。疾く疾く一同御通りあれ。」

いふに人々ほつと息、毒蛇の口を逃れし思ひ、さらばさらばと立ちあがり、關路をあとにしづ〳〵と、奥州さして下りけり。

二五 我が幼時

新井白石

新井白石 名は君美。儒者。政治家。江戸の人。享保十年(一三五)歿、年六十九。

上松 忠兵衛某といふ、駿河今川の家人上松が後にて、連歌などをもこのみて、物よく書きし人なりき。(原註)

頑 學匠

我が六歳の夏の頃、上松といひし人の、少しく文字などありしが、七言絶句の詩一首教へて、その意を解きかせしに、やがて誦をなしければ、三首まで教へられしをば、人にも講じきかせたりき。「この兒文才あり。いかにも師を選びて學ばしめらるべし。」など、彼の人もいひしかど、頑(かたくな)なる昔人達のいひしは「昔より言ひ傳へし事あり。利根・氣根・黄金の三こんなくしては學匠になり難しといふなり。この兒、利根こそ生れつきたらめ、なほ幼くして、その氣根の事も料り難く、家富めりとも見えねば、黄金の事

戸部上總久留里侯土屋民部少輔利直。

心得られず。」などいひあへりしに、我が父も、「戸部の御いつくしみによりて、常に側を離れまゐらせず、學に入れ師に從はしめむ事もかなふべからず。されど、をさなきより、物書く事をば、戸部も人々に語り誇らせ給ひしことなれば、せめて、物をば書き習はしめたくこそ侍れ。」とて、我が八歳の秋、戸部の上總國にゆき給ひしあとにて、手習ふ事ををしへしめらる。

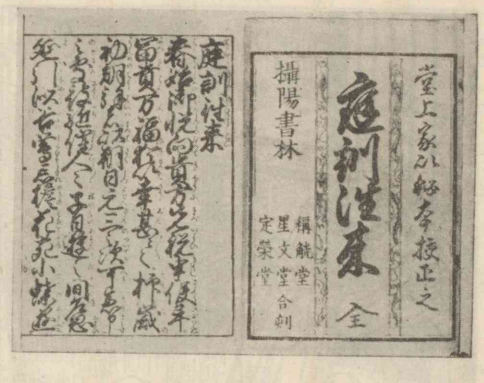
その冬の十二月半ば、戸部歸り參り給ひしかば、常に側に侍ふ事、故の如く、明けの年の秋、復、國にゆき給ひしあとにて、課を立てられて、日の中には行草の字三千、夜に入りて一千字を限りて書き出すべしと命ぜられたり。冬に

至りぬれば、日短くなりて、課は未だ滿たざるに、日暮れむとすること度々にて、西向きなる竹縁のある上に、机を持出でて、書き終りぬることもありき。又、夜に入りて手習ふに、睡の催して堪へ難きに、我に附けられし者と竊に謀りて、水二桶づつかの竹縁に汲みおかせて、いたく睡の催しぬれば、衣脱ぎ棄てて、先づ一桶の水をかぶりて、衣うち着

白石の勉學

て習ふに、はじめ冷やかなるに目さむる心地すれど、しばし程經ぬれば、身暖かになりて、また〳〵ねむくなりぬれば、また水をかぶること先の事の如くす。二たび水をかぶりぬる程には、大やうに課をも滿てたりき。これ我が九歳の秋・冬の間の事なり。

かゝりしほどに、この頃よりは、我が父の人におくりたまふ文をば、かたのごとく書くには書きたり。十一歳の秋、また課を立てられて、庭訓往來をならはしめられ、十一月に至り



庭訓往來

大やうに

かたのごとく

庭訓往來　僧玄惠の作であると傳へらる。室町時代に普通行はれた、一月から十二月に至る漢文體の消息文集である。

て、十日の中に淨寫してまゐらすべしと命ぜられ、命ぜられしごとくに事を終へしかば、册になして戸部に見せまゐらす。ほめたまふこと大方ならず。十三の時よりは、戸部の人と贈答し給ふ程の文ども、大方は我に命ぜられき。

また、十一歳の時に、我が父の友に關といひし人の子どもは、太刀打の業にすぐれて人に敎ふることありしを、我にもこの業敎へられむ事を望みしに、「わぬしいまだ幼し、是等の業學ばむこと遲からず。」といふ。「さこそ侍るべけれど、太刀使ふこと少しも心得ざらむには、刀・脇指腰にせむ事、誠に不用の事にや。」といひしかば、「のたまふ所誠

大方ならず

わぬし

十六になりし者　神戸といひしものの二男なり。（原註）

若侍　長谷川といふものなり。（原註）

翁問答　五卷。中江藤樹の著。儒教の大意を老翁の物語に托し、假名書に和らげて記す。

にしかなり。」とて、一つの業を傳へて習はしめたり。かかりし程に、その歳十六になりし者の、我と藝を試みむといひしかば、木刀をとりて、三度あひて三度まで勝つ事を得たりしにぞ、人々も亦興に入りて笑ひたりける。その後は常にかゝる武藝の事どもを好みて、手習ふことなど心にも染まずありしかど、物讀むことをも好みければ、常に我が國の物語・草紙の類をば見ずといふもものもなかりき。

十七歳の時にいたりて、同じやうに召使はれし若侍の許に行きしに、案の上に書あるを見れば、翁問答と題せしものなり。如何なる事をかしるしぬらむと思ひて、借る

京の人　江馬益庵といふ、名は玄牧。（原註）

小學　六卷。支那古來の嘉言・善行を輯む。

四箴　支那宋の程頤の視聽言動の四箴をいふ。

四書　大學・中庸・論語・孟子。

五經　易經・書經・詩經・春秋・禮記。

韻會　支那元の熊忠の撰。漢字典。

字彙　支那明の梅膺祚の撰。漢字典。

彙（ヰ）

事を得て、家に携へ歸りて見けるにこそ、始めて、聖人の道といふものある事をば知りけれ。これより、道に志切なりけれど、師とすべき人もあらず。京の人にて醫を業とし少し學問あるが、戸部の許に、日々來れるあり。この人に向ひて志の程を語りしに、小學の題辭を講じきかせられたり。その後、又程子の四箴をも講じきかせられしより、やがて、小學の書を日夜に誦し習ひて、業既に畢りぬれば、四書を誦し習ひ、その後また五經をも誦し習ひたれど、これ等皆々句讀を授けし師あるにもあらず、自ら韻會・字彙等の書によりて誦し習ひければ、後に思ふに僻事のみぞ多かりける。

（折焚く柴の記）

下村　宏
法學博士。和歌山縣の人。明治八年生。

成吉思汗
支那、元の始祖。成吉思とは蒙古語で强盛の意、汗は王の意。西紀一二二七年歿、年六十六。

二六　理想を持つて進め

下　村　宏

歐亞の天地を征服した成吉思汗の大宰相耶律楚材は、十人に師たるものは百人に師たるべし。といふやうな意味のことを話したさうであるが、それは軍隊などの場合ばかりではない。人間は心の持ち方一つで、少しでも眼のつけどころが高く大きく、少しでも力の入れ方が强く、頭の働き方が鋭く、人格の光が少しでも明らかに、德望が少しでも厚かつたなら、田舍では村長になり、大都會に出づれば市長となり、更に一國の宰相にもなれるといふのである。

boys
be ambitious

クラーク
アメリカの科學者・教育家（西紀一八二六―一八八六）。

明治の初年に北海道の農學校に招かれて、そこに數多い人材をつくり上げ、いまだに敬慕の的になつてゐるアメリカ人クラークは、札幌を去るにのぞみ、「ボーイズ　ビ　アンビシャス。」といつた。この言葉の意味は、人間は望を大きく持てといふことである。「小成に安んずるなかれ。」といふ言葉と相似てゐる。「大成を念とせよ。」といふのである。百を願つて五十に達するのが例である。「望は常に大きくあれ。」といふのである。

どうも日本人には哲學がない、理想がないなどと失禮な事をいふ外人もないではない。勿論、人間にはそれぞれの天分がある。小男に力士になり、横綱になれ、といつ

ても無理である。老幼男女それ〴〵に趣味もあり、好みもある。しかし、われ〳〵はたゞ自分が長生したい、出世したい、金儲がしたい、といふだけでは、人生の意義は甚だ小さく貧しい。

私が今、大東京又は大大阪何百萬市民の一人で、中學生であるとする。私はまだ親のすねをかじつてゐる。學校へ通學して、勉強し、進級する。しかし、たゞそれだけで善いといふのでは足りない。たとへ若年でも微力でも、或理想を持つて進みたい。人生の目的心願を立てて、その日その日を送りたい。いかに僅なりとも世の中へ何等かの事をしておきたい。さうした考へは誰もが持つ

てゐてよい筈だと私は思ふ。

中學の生徒であつても、大東京・大大阪を愛し、都市を清掃し綺麗にするといふ理想は持ちうる。さうして自分の家で、庭で、往來で、學校へゆく電車・汽車の中で、學校の教場で、校庭で、修學旅行の時にも、遠足の時にも、自分で芥を捨てない、汚くしない。更に芥があり、汚くしてあれば、その芥をとりのけ、綺麗にするといふ事は出來る筈である。

私は日本國民全體の教育の普及、智育の發達に努めたい。私の家では新聞をとつてゐる、雜誌・書物も求めてゐる。其の不用になつたものを、近邊の工場の職工の休憩所や、故郷の小學校の圖書室へ贈つてゐる。此の程度の

事は誰にでも出來る筈であり、根よく續けてゐれば、何時かは一家一族・隣人・友人にまで感化を與へずにはおかぬ。「塵も積れば山となる。」或は「滴滴岩を穿つ。」といふ諺がある。何時かは山となり、岩を穿つ。いや山とならずとも、岩を穿たずとも、人間は先づ岩を穿たう、山をつくらうといふ理想を持ち、己一身のみならず、社會のため、國家のため、人類のため、なにがしか奉仕を續けるべきである。さうして偶〻一度生れ二度と生れざる一生を送るべきである。人間が社會のために或理想を持つて進んでゆく、それが人類の進むべき道である。それが日本人の進むべき道である。

（これからの日本これからの世界）

二七　世界三都の印象

鶴見祐輔

鶴見祐輔　社會評論家。群馬縣の人。明治十八年生。

パリー　フランスの首府。人口二七八萬。

フランス人は勤勉な國民である。イギリス人も勤勉な國民である。併し、其の勤勉さには相違があるやうに思はれる。勤勉それ自身に本質的の差がある譯はないけれども、英・佛人の勤勉性の差は、單に外形的・形式的相違だけには止らぬやうである。それは兩國民の國民性の相違から生ずるのではあるまいか。然らば、其の國民性は如何に相違して居るだらうか。こんなことを考へながら、私は一人でよくパリーの公園を歩いてゐた。そして、これにアメリカを今一つ加へて、よく三國の國民性を

ニューヨーク　アメリカ大西洋岸の大都會。人口六九五萬。

ロンドン　英國の首府。人口四四〇萬。

鋪―舗

比較して見た。

三國の特色は其の大都會に於て著しく眼に着く。それは都會は其の國の國民性を最も鮮やかに映し出して居るからである。多くの人はニューヨークはあまりに歐洲化して居ると言ふが、併し、ニューヨークに一日居ると、我々はアメリカの大空氣が全身に躍動するのを意識せずには居られない。ニューヨークはやはり米國である。そして、ロンドンは英國であり、パリーは佛國である。

――恰も東京が日本であるやうに。

話はまた英・佛人の勤勉性に還る。朝早くパリーの街を歩くと石の鋪道の上にはもう綺麗に打水がしてある。

凱旋門のあたりの廣場には、花賣の露臺が幾つともなく立並んで、新聞賣の小舍と共に、心地よい朝の活動を象徴して居る。黑い質素な着物を着た女達が、耳に快いフランス語で笑ひ興じながら、忙しげに花に水を灑いだりなどして居る。

ロンドンの下町に晝頃行くと、狹い側道の上に、商館や銀行などの事務員かと見える若者が、帽子も冠らずに、何百人となく忙しげに往來して居る。私は此の群の中を縫ふやうにして歩きながら、遠いアフリカや印度の貿易を机の上でやつて居る此の人々の日常生活を考へた。そして、フランス人とは種類の違ふ此の人々の勤勉さを

クールヴァン　佛國の女流小説家。

憐―隣

も考へた。こんな時には、何時もフランスの小説家クールヴァンの言葉が腦裡に閃いた。「佛國人は蜜蜂のやうに勤勉に、英國人は蟻のやうに精勵である。」と。パリーとロンドンの生活を見て居る内に、此の言葉の深い意味が、日一日と自分の頭腦に深く沁みて行つた。晴れわたつた初夏の日盛りに、寸刻の隙もなく、花から花へ蜜を求めて翔つて行く可憐な蜜蜂の勤勉が、如何にもよく佛國人の朝起の心持を現して居るやうに思はれた。そして、來るべき冬の支度の爲、營々として重い餌を引摺つて行く健氣な蟻の精根が、如何にもよく英國人の勤勉を現して居るやうに思はれた。

観音堂　東京市淺草公園内に在る金龍山淺草寺。

阿鼻叫喚

それならば、米國人のあのいら〳〵した忙しさは何に喩へられようかと考へて見た。私の頭の中に、ふと淺草の觀音堂の鳩が浮んで來た。何時行つて見ても、大勢の人込の中で、幾十百羽の鳩が、我劣らじと押しあひへしあひ、地上の豆を拾つて居る。物音に脅かされて飛び立たうと、半分氣を外に配りながら、それでも眼前の豆粒は一つでも餘計に食べようと、眼の色を變へて何時までも餌を拾つて居る。米國人の勤勉は正に此の鳩のやうに餘裕がないと私には考へられた。

朝の出勤時間頃にニューヨークの地下鐵道に乗る人人は、これが此の世ながらの阿鼻叫喚ではないかと思は

れるやうな雑沓を目撃する。或日、私は汽車の切符を買ひに市内營業所まで行つた。大勢の客が群集してゐた。係の若い米國人が、私の行先と列車とを聽き取り、頓て右手の袖を一寸捲り上げて、鉛筆持つ其の手を切符の紙の上で左右に五六回激しく振つた。何をするのかと呆氣に取られて居ると、忽ちかつと手を紙の上に落して、すると切符の文字を眼の廻るやうな早さで書き終へた。只今手を振つたのは、結局手に運轉を付ける爲だつた。私は噴き出すやうな可笑しさを感じた。何もさう手に運轉を付けないでも、大して時間に相違もなく字が書けようし、又運轉を付ける時間だけ無益のやうな氣がした。

其の翌年、私は英國の商務院の鐵道局に、賃金引上の一覽表を貰ひに行つた。すると、係の若い英國紳士が、「たしか此の机の中に一枚だけ統計表を入れて置いた筈だ。」と言つて、自分の机の抽出を開けた。私は見るともなく其の抽出の中を覗き込んで見て驚いた。まあ、何といふ多數の書類だらう、累々と種々な紙片が堆積されてゐる。それを件の若い紳士は手を突つ込んでがさ〳〵と搔廻して、「此處にはない。」と言つて、次の抽出また其の次の抽出を開け、そして、最後の抽出の底から、やつと賃金表を見付け出した。「これは差上げる譯に行かないから、此處で見て下さい。」と言ふから、「一度見ただけでは迚も覺えら

タイピスト

れませんね。」と答へると、一寸當惑して、「それでは私が寫してあげませう。」と言つて、それを別の白紙に筆寫し始めた。ニューヨークならば、傍らに居る若い女のタイピストに命じて、一分間内に寫させるところであるが、件の若い紳士は、先づ自分の机の上の大きな吸取紙の上に原本の統計表を置いて其の上に白紙を當てて書き出した。私は一寸面喰つた形で、此の異樣な淨寫法を見てゐた。すると、彼は白紙の上に數字を一行書いた。そして、今度は其の白紙を左手で持上げて、下の原本を覗いて次の行の數字を諳記して、また白紙を其の上にぺたりと置いて、諳記しただけ書いて、また前のやうに紙を持上げて原本

吸—汲

を覗き、また其の上にかさねて書いた。不思議な遣り方だと見て居ると、頓て書き終へた。インキが乾いて居ない。そこで、今度は其の紙と原本と二枚持上げて、下敷になつて居る吸取紙の上に裏向きに置いて、丁寧にインキを拭き取つて、さて私に其の淨書をくれた。ニューヨークから到着したばかりの私は、全く呆氣に取られて此處を出て行つた。そして、幾回となく鉛筆持つ手を振つて運轉を付けて、猛烈な勢で切符の文字を書いた米國人と較べて考へて見た。

其の春、パリーの郵便局に書留小包を出しに行つた。慣れない私は、誤つて受取人の欄へ自分の住所・姓名、差出

人の欄へ先方の住所・姓名を書いてゐた。これを局の小窓から差出す時、私はふと氣付いて「おや」と言ふと、局員の佛國人がつとペンを取つて、受取人といふ字を抹消して差出人と書き、差出人といふ字を抹消して受取人と書いた。なるほど、これで送票は完成した譯である。而もそれがほんの一瞬間だつた。私は全く感服して了つた。そしてニューヨークの切符賣と、ロンドンの役人と、パリーの郵便局員とを頭の中で列べて見た。――鳩と蟻と蜜蜂と。

（三都物語）

新制國語讀本　卷二　終

常用漢字

（大正十二年五月臨時國語調査會發表、昭和六年五月修正）（千八百五十八字）

【一】一丁七丈三上下不世丙並【丨】中【丶】丸主【丿】之久乏乘【乙】乙九乞也乳亂【亅】了事【二】二互五井【亠】亡交京亭亦【人】人仁仇今介仕他付代令以仰仲件任伊伏伐休伯伴伺似位低住佐何余佛作伸使來佳例侍供依侮侯侵便係促俱俊俗保俠信修俳俵俸倂倉個倍倒候借倫假偉偏停健偶偶傍傑備催働傳債傷傾僅像僚僞僧價儀億儉償優【儿】元兄充兆兇先光克免兎兒【入】入內全兩【八】八公六共兵具其典兼【冂】冊再【冖】冗【冫】冬冷凉准凌凍【凵】凡【凵】凶出【刀】刀刃分切刊刑列初判別利到制刷券刺刻則削前剛副剩割創劇劍劑【力】力功加劣助努効勅勇勉動勘務勝勞募勢勤勳勵勸【勹】包【匕】化北【匚】區【十】十千升午半卑卒卓協南博【卜】占【卩】印危却卵卷卽【厂】厄厘厚原厥【厶】去參【又】及友反叔取受【口】口古句叫召可史右司各合吉同名后吏吐向君吟否含呈吸吹告咸周味呼命和咽哀品員哲唐唯唱商問啓善喉喜喪喫單嗣嘉器噴嚴囑【口】囚四回因困固國圍園圓圖團【土】土在地坂均坊坑坪垂型埋城域執培基堀堂堅堤堪報場塔塗塵境墓墳增墨墮壁壇壓壞壞【士】士壯壹壽【夂】夏【夕】夕外多夜夢【大】大天太夫央失奇奉奏契奔奢奥奪奬奮【女】女奴好如妃妊妥妙妨妹妻姉始姑姓委姦姪姫姻姿威娘娯娠娼婚婦婿媒嫁嫡嫌孃【子】子字存孝季孤孫學【宀】宅守安宏完宗官定宜客宣室宮害宴家容宿寄密富寒察寢實審寫寛寶【寸】寸寺封射將專尉尊尋對導【小】小少尙【尢】就【尸】尺尼尾尿局居屆屈屋展層履屬

【山】山岡岩岳岸峠峯島
峽崇崎崩【巛】川州巡巢
【工】工左巧巨差【己】己
【巾】市布帆希帝帥師席
帳帶常帽幅幕幣【干】干
平年幸幹【幺】幻幼幾【广】
床序底店府度座庫庭庶
康廉廓廢廣廳【廴】延廷
建廻【廾】弄弊【弋】式
【弓】弓弔引弟弱張强彈
【彡】形彩彫影彰【彳】役
彼往征待律後徐徑徒得
從御復微徵德徹【心】心
必忌忍志忘忙忠快念怒
思怠急性怨怪怯恐恥恨
恩恭息悔悟悖患悲惟悼

情惑惜惠惡惰惱想愁愉
意愚愛感慈態慕慘慢愼
慣慨慮慰慶慾憂憐憚憲
憶憾憤懇應懲懷懸戀
【戈】成我戒戰戲戴【戶】
戶戾房所扇【手】手才打
扱扶批承技抑投抗折抱
抵押披抽拂拍拒拓拔拘
拙招拜括拳拾持指振捕
捧描捨掃授掌排掛採探
控推揚接提換握插揭揮
援損搖搜摘携摩撫擇擊
操擔據擬擴攝【支】支
【攴】收改攻放政故敍教
敏救敗敢散敬敵數數整
【文】文【斗】斗料斜【斤】

斤斥斬新斷斯【方】方施
旋旅族旗【旡】既【日】日
旦旨早旬旭昇昌明易昔
星春昭昨是映時晚晝普
景晴晶智暇暖暗暑暮暴
曆曇曜【曰】曲更書曹會
替最會【月】月有朋服朕
朗望朝期【木】木未末本
札朱机朽杉材村束柿杯
東松板枕林枚果枝枯架
柄某染柔査柩柱柳栗校
株根格栽桃案桐桑梅條
梨械棄棋棒棟森棺植楠
業極榮構槪樂樓標樞模
樣樹橋機橫檄檢櫻欄權
【欠】次欲款欺歌歎歐歡

【止】止正此步武歲歷歸
【歹】死殊殉殖殘【殳】段
殺殿毀【毋】母每毒【比】
比【毛】毛【氏】氏民【气】
氣【水】水氷永汁求汗汚
江池決汽沈沒沖沙汰河
沸油治沼沿況泉泊法波
泣泥注泰泳洋洗津洪活
派流浦浪浮浴海浸消涉
液淑淚淡淨淫深混清淺
添減淵渡溫測港渴湖湧
湯源準溢溶溺滅滋滑滯
滴滿漁漂漆漏演漕漠漢
漫漸潔潛湖澤激濁濃濕
濟濱瀧灣【火】火灰災炊
炎炭烈無然煉煮煙照煩

熟熱燃燈燒營爆爐【爪】
爪爭爲爵【父】父【爻】爾
【片】片版牌【牙】牙【牛】
牛牧物牲特犧【犬】犬犯
狀狂狩狹猛猫猶獄獨獲
獵獸獻【玄】玄率【玉】玉
王玩珍珠班現球理琴環
甕【瓦】瓦瓶【甘】甘
甚【生】生產甥【用】用
【田】田由甲申男町界畏
畑畜畝略番畫異畱當疊
【疋】疋疎疑【疒】疫疲疾
病症痘痛痢療癖【癶】登
發【白】白百的皆皇【皮】
皮【皿】皿盆益盛盜盟盡
監盤【目】目盲直相省眉

看眞眠眼着睡督【矢】矢
知短【石】石砂砲破研硬
硯碁碎碑確磁磨礎【示】
示社祈祕祖祝神票祭禁
禍福禦禮【禾】秀私秋科
秒租秩移稅程稚種稱稻
稿穀積穗穩【穴】穴究空
突窃窒窓窮【立】立章童
端競【竹】竹竿笑笛符第
筆等筋筒答策算管箱節
範築篤箇簿籍【米】米粉
粒粘粗粹精糖糞【糸】系
紀約紅紋納純紙級紛素
紡索紫累細紳紹紺終組
結絕絡給統絲絹經綠維
綱網綴綻綿緊緒線締緣

編緩緯練縛縣縫縮縱總
績繁織繕繪繭繰繼續
【缶】缺【网】罪置署罰罵
罷羅【羊】羊美羣義【羽】
羽翁翌習翼【老】老考者
【而】耐【耒】耕【耳】耳聖
聞聯聲職聽【聿】肅肇
【肉】肉肖肝股肥肩育肺
胃背胎胞胴胸能脅脈脊
脚脫腐腕腦腰腸腹膚膜
膝膽臆膺臟【臣】臣臥臨
【自】自臭【至】至致臺
【臼】與興擧舊【舌】舌舍
【舛】舞【舟】舟航般舵船
船艦【良】良【色】色【艸】
芝花芽芳苑苗若苦英茂

茶草荒荷莊菊菌菓菜華
萬落葉著葬蒙蒸蓄蔓薄
藏藝藤藥【虍】虎虐處虛
號【虫】蚊蛇蛙蜂蜜融蟲
蠶蠻【血】血衆【行】行術
街衝衡衞【衣】衣表衰袋
袖被裁裂裏裕補裝裸製
複褒襲【襾】西要覆【見】
見規視親覺覽觀【角】角
解觸【言】言訂計討訓託
記訟訪設許訴診詐詔評
詞詠試詩詰話詳誇誌認
誓誕誘語誠誤說課調談
請論諭諸諾謀謁諮講謝
謠謹謬證識譜警譯議護
譽讀變讓【谷】谷【豆】豆

豐【豕】豚象豪豫【貝】貝
貞負財貧貨販貫責貯貳
貴買貸費貿賀賃賄賚賊
賓賜賞賢賣賤賦質賴購
贈贊【赤】赤【走】走赴起
超越趣【足】足距跡路踊
躍【身】身【車】車軌軍軒
軟軸較載輕輩輪輯輸輿
轉【辛】辛辨辭辯【辰】辰
農【辵】辷迎近返迫迭述
迷追退送逃逆透逐途通
速造連週進逸遂遇遊運
過道達違遙遞遠遣適遭
遲遷選遺避還邊邉【邑】
邦邪邸郊郎郡部郵都鄕
【酉】酌配酒酢酬酷酸醉
醜醫【采】釋【里】里重野
量【金】金釜針釣鈍鈴鉛
鉢銀銃銅銘鋭鋒鋼錯錄
錢鍋鎖鎭鏡鑄鐘鐵鑑鑛
【長】長【門】門閉開閑間
閣閲關【阜】防附降限陛
院陣除陪陳陰陵陶陷陸
陽隆隊階隔隙際障隣隨
險隱【隹】隻雀雄雅集雇
雌雙雜離難【雨】雨雪雲
零雷電需震霜霧露靈
【靑】靑靜【非】非【面】面
【革】革靴【音】音響【頁】
頂項順頓頒頭領頸頻題
額顏顧顚類顧顯【風】風
【飛】飛飜【食】食飢飲飯
飾養餓餘餅館餐【首】首
【香】香【馬】馬馳駁駄駐
騎騰騒驅驗驚驛【骨】骨
髓體【高】高【髟】髮【鬥】
鬪【鬼】鬼魂魔【魚】魚鮮
鯉鯛【鳥】鳥鳩鳴鶴鷄
【鹵】鹽【鹿】鹿麗【麥】麥
【麻】麻【黃】黃【黑】黑默
點黨【鼓】鼓【鼻】鼻【齊】
齋【齒】齒齡【龍】龍【龜】
龜

注意

（一）本表にない漢字は假名で書くこと　（二）固有名詞には本表にない文字を用ひても差支ない、だし外國（支那を除く）の人名地名は假名書とすること　（三）代名詞、副詞、接續詞、感動詞、助動詞および助詞はなるべく假名で書くこと　（四）外來語は假名で書くこと。

しわ（皺）
しわし（咨）
すわる（坐）
たわし（束藁子）
ゐ（井）
すゑ（末）
すゑひろ（末廣）
こずゑ（木末・梢）
うゑ（飢・餓）
ゐ（直）
をさをさ（ナホ）
をしどり（鴛鴦）
をしふ（教）
をしむ（惜）
をす（食・治）
ねぢ（螺旋）
ねぢく（拗）
あぢさゐ（紫陽花）
ちぢむ（縮）
なんぢ（汝）

注意

（一）本表にない漢字は假名で書くこと　（二）固有名詞には本表にない文字を用ひても差支ない、だし外國（支那を除く）の人名地名は假名書とすること　（三）代名詞、副詞、接續詞、感動詞、助動詞および助詞はなるべく假名で書くこと　（四）外來語は假名で書くこと。

國語假名遣表

わ　は

語の上でわ・はは紛れることはない。語の中と下とで紛れる。左の語の外は、はと書く。

あわ（泡・沫）
みなわ（水沫）
あわつ（周章）
あわただし（倉皇）
いひわけ（言分）
のわけ（野分）
おひわけ（追分）
うらわ（浦回）
しまわ（島回）
かわく（乾・渇）
くつわ（轡）
はにわ（埴輪）
くわゐ（慈姑）
ことわざ（諺）
しわざ（爲業）
ことわる（斷・理）
こわいろ（聲色）
こわだか（聲高）
こわね（聲音）
さわぐ（騷）
さわやか（爽）
しわ（皺）
しわし（吝）
すわる（坐）
たわし（束藁子）
たわむ（撓）
たわわに（撓）
たわやか（嬋妍）
たわやめ（手弱女）
わら（俵）
はらわた（腸）
ひわ（鶸）
ゆわう（硫黄）
よわし（弱）
かよわし（弱）
いわし（鰯）

ゑ　え　へ

語の上ではゑ・えが紛れ、語の中・下ではゑ・え・へが互に紛れる。左の語の外はへと書く。

ゑ（繪）
ゑのぐ（繪具）
ゑかき（畫工）
ゑがく（畫く）
とも ゑ（鞆繪・巴）
ゑ（餌）
ゑぼし（烏帽子）
ゑむ（笑）
ゑがほ（笑顔）
ゑくぼ（靨）
ゑつぼ（笑壺）
ゑじ（衛士）
ゑふ（醉ふ）
ゑひどれ（醉客）
こゑ（聲）
つゑ（杖）
ゆゑ（故）
すゑ（机）
すゑ（据）
すゑふろ（据風呂）
いしずゑ（礎）
すゑ（末）
すゑひろ（末廣）
こずゑ（木末・梢）
うゑ（飢・餓）
うゑ（植）
うゑき（植木）
うゑごみ（前栽）
ちゑ（智慧）
え（兄）
えと（兄弟）きのえ（甲）
ひのえ（丙）つちのえ（戊）
かのえ（庚）みづのえ（壬）
え（枝）
しずえ（下枝）
え（江）
いりえ（入江）
ふえ（笛）
さざえ（螺螺）

を　お

をとこ（男）
めをと（夫婦）
たけを（猛夫）
ますらを（丈夫）
をひ（甥・姪）
をし（雄雄）
を（小）
をぢ（伯父・叔父）
をば（伯母・叔母）
をとめ（少女）
を（女）
をみなへし（女郎花）
を（尾）
をばな（尾花）
を（緒）
はなを（鼻緒）
を（麻・苧）
をけ（桶）
をさ（筬）
をか（岡・丘・陸）
をかば（陸稻）
をがむ（拜）
をかす（犯）
をぎ（荻）
をこ（痴）（愚）
をこがまし（痴）
をかし（可笑）
をさ（長）
をさなし（幼）
をさむ（治・修・收・藏・納）
をさを（大抵）
をしどり（鴛鴦）
をしふ（教）
をしむ（惜）
をす（食・治）
をち（遠）
をちこち（遠近）
をととし（一昨年）
をとひ（一昨日）
をとり（囮・媒鳥）
をどる（踊・跳・躍）
をの（斧）
をのく（慄）
をはる（終・卒・了）
をり（檻）
をり（節）
をり（居）
をる（折）
をしき（折敷）

ゐ　い　ひ

じ　ぢ

じ・ぢは語の上・中・下ともに紛れる。左の語の外は、じと書く。

ぢ（父）
をぢ（伯父・叔父・小父）
ぢぢ（爺・祖父）
ぢ（路）
やまぢ（山路）
すぢ（筋）
うぢ（氏）
ひぢ（臂）
あぢ（味）
あぢはひ（味）
あぢ（鯵）
いぢらし（可憐）
かぢ（梶）
かぢ（鍛冶）
ひぢ（泥）
ふぢ（藤）
ふぢばかま（藤袴）
かうぢ（麹）
くぢら（鯨）
よぢる（攀）
けぢめ（區別）
ことぢ（琴柱）
ねぢ（螺旋）
ねぢく（拗）
あぢさゐ（紫陽花）
ちぢむ（縮）
なんぢ（汝）
もみぢ（紅葉）
わらぢ（草鞋）
なめくぢ（蛞蝓）
みそぢ（三十）
よそぢ（四十）
いそぢ（五十）
むそぢ（六十）

ず　づ

ず・づは語の上・中・下ともに紛れる。左の語の外は、

國語假名遣表

わ は

語の上でわ・はは紛れることはない。語の中と下とで紛れる。左の語の外は、はと書く。

あわ(泡・沫)
みなわ(水沫)
あわつ(周章)
あわただし(倉皇)
いひわけ(言分)
のわけ(野分)
おひわけ(追分)
うらわ(浦回)
しまわ(島回)
かわく(乾・渴)
くつわ(轡)
はにわ(埴輪)
くわゐ(慈姑)
ことわざ(諺)
しわざ(爲業)
ことわる(斷・理)
こわいろ(聲色)
こわだか(聲高)
こわね(聲音)
さわぐ(騷)
さわやか(爽)
しわし(瘠)
すわる(坐)
たわし(束藁子)
たわむ(撓)
たわに(撓)
たわやか(嬋妍)
たわやめ(手弱女)
たわら(俵)
はらわた(腸)
ひわ(鶸)
ゆわう(硫黃)
よわし(弱)
かよわし(弱)
いわし(鰯)

ゐ い ひ

語の上ではゐ・いが紛れ、語の中・下ではゐ・い・ひが互に紛れる。左の語の外はひと書く。

ゐ(井)
ゐげた(井桁)
ゐづつ(井筒)
ゐぜき(井堰)
ゐなか(田舍)
ゐ(居)
ゐざり(膝行)
かもゐ(鴨居)
しきゐ(閾)
くもゐ(雲居)
くらゐ(位)
しばゐ(芝居)
とりゐ(鳥居)
まどゐ(團欒)
もとゐ(基)
ゐ(猪・亥)
ゐのしし(猪)
ゐのこ(豕)
いぬゐ(乾)
ゐ(胃)
ゐる(率る)
ひきゐる(率ゐる)
あゐ(藍)
くれなゐ(紅)
あぢさゐ(紫陽花)
くわゐ(慈姑)
まゐる(參る)
おい(老)
くい(悔)
むくい(報)

ゑ え へ

語の上ではゑ・えが紛れ、語の中・下ではゑ・え・へが互に紛れる。左の語の外はへと書く。

ゑ(繪)
ゑのぐ(繪具)
ゑかき(畫工)
ゑがく(畫く)
ともゑ(鞆繪・巴)
ゑ(餌)
ゑぼし(烏帽子)
ゑむ(笑)
ゑがほ(笑顏)
ゑくぼ(靨)
ゑつぼ(笑壺)
ゑじ(衞士)
ゑふ(醉ふ)
ゑひどれ(醉客)
こゑ(聲)
つゑ(杖)
つくゑ(机)
ゆゑ(故)
すゑ(据)
すゑふろ(据風呂)
いしずゑ(礎)
すゑ(末)
すゑひろ(末廣)
こずゑ(木末・梢)
うゑ(飢・餓)
うゑ(植)
うゑき(植木)
うゑごみ(前栽)
ちゑ(智慧)
え(兄)
えと(兄弟)きのえ(甲)
ひのえ(丙)つちのえ(戊)
かのえ(庚)みづのえ(壬)
え(枝)
しずえ(下枝)
え(江)
いりえ(入江)
ふえ(笛)
さざえ(螺螺)
はえ(映)
ゆふばえ(夕映)
もえ(萌)
もえぎ(萌黃)
みえ(外見)
はえ(生)
ひこばえ(蘖)
いえ(癒)
あまえ(甘)
おびえ(脅)
おぼえ(覺)
きえ(消)
きこえ(聞)
こえ(越)
こえ(肥)
こごえ(凍)
さえ(冴)
さかえ(榮)
そびえ(聳)
たえ(絕)
にえ(煮)
ひえ(冷)
ふえ(殖)
ほえ(吠・吼)
もえ(燃)
もだえ(悶)

を お ほ (ふ)

語の上ではを・おが紛れ、語の下・中ではほ・を・ふが紛れる。おは語の中・下に用ひることはない。左の語の外は語の上ではお、中と下とではほと書く。

を(男・雄・夫・牝)
をつと(夫)
をとこ(男)
めをと(夫婦)
たけを(猛夫)
ますらを(丈夫)
をひ(甥・姪)
をし(雄雄)
を(小)
をぢ(伯父・叔父)
をば(伯母・叔母)
をとめ(少女)
を(女)
をみなへし(女郎花)
を(尾)
をばな(尾花)
を(緒)
はなを(鼻緒)
を(麻・苧)
をけ(桶)
をさ(筬)
をか(岡・丘・陸)
をかぼ(陸稻)
をがむ(拜)
をかす(犯)
をぎ(荻)
をこ(痴)(愚)
をこがまし(痴)
をかし(可笑)
をさ(長)
をさなし(幼)
をさむ(治・修・收・藏・納)
をさを(大抵)
をしどり(鴛鴦)
をしふ(教)
をしむ(惜)
をす(食・治)
をち(遠)
をちこち(遠近)
をととし(一昨年)
をととひ(一昨日)
をとり(阨・媒鳥)
をどる(踊・跳・躍)
をの(斧)
をのく(慄)
をはる(終・卒・了)
をり(檻)
をり(節)
をり(居)
をる(折)
をしき(折敷)
しをる(萎)
しをり(栞)
つづらをり(九十九折)
をろち(大蛇)
あを(青)
あをがひ(螺鈿・青貝)
あをし・あをむ(青)
いざを・いざをし(功績)
うを(魚)
かつを(鰹)
しらを(白魚)
ひを(氷魚)
かを(香・薫)
さを(竿・棹)
しをん(紫苑)
しをらし(可憐)
たをる(萎)
たをやか(嬋妍・手弱女)
とを(十)
ばせを(芭蕉)
まをす(申)
みさを(操)
みを(澪・水脈)
みをつくし(澪標)
やをら(徐)
あふひ(葵)
あふぐ(仰)
あふぎ(扇)
あふる(煽)
あふみ(近江)
とほたふみ(遠江)
きのふ(昨日)
けふ(今日)
さふらふ(候)
たふる(仆・倒)
たふとし(貴)
はふる(投)
ふくろふ(梟)

じ ぢ

じ・ぢは語の上・中・下ともに紛れる。左の語の外は、じと書く。

ぢ(父)
をぢ(伯父・叔父・小父)
ぢぢ(爺・祖父)
ぢ(路)
やまぢ(山路)
すぢ(筋)
うぢ(氏)
ひぢ(臂)
あぢ(味)
あぢはひ(味)
あぢ(鯵)
いぢらし(可憐)
かぢ(梶)
かぢ(鍛冶)
ひぢ(泥)
ふぢ(藤)
ふぢばかま(藤袴)
かうぢ(麹)
くぢら(鯨)
よぢる(攀)
けぢめ(區別)
こぢ(琴柱)
ねぢ(螺旋)
ねぢく(拗)
あぢさゐ(紫陽花)
ちぢむ(縮)
なんぢ(汝)
もみぢ(紅葉)
わらぢ(草鞋)
なめくぢ(蛞蝓)
みそぢ(三十)
よそぢ(四十)
いそぢ(五十)
むそぢ(六十)

ず づ

ず・づは語の上・中・下ともに紛れる。左の語の外は、づと書く。

ず(誦)
ずず・じゆず(數珠)
ずるし・ずるける(狡猾・怠慢)
あんず(杏子)
ゆず(柚子)
いしずゑ(礎)
こずゑ(梢)(木末)
かず(數)
かならず(必)
きず(傷・疵・瑕)
くず(葛・國栖)
すず(鈴・錫)
すずき(鱸)
すずし・すずむ(涼)
すずしろ(蘿蔔)
すずな(菘)
すずめ(雀)
すずりぐ(硯)
すずろ(漫)
たたずむ(佇)
なずらふ(準)
ねずみ(鼠)
はず(筈・弭・理)
やはず(矢筈)
ゆはず(弭)
はずみ(機)
まず(雜・交・混)
みみず(蚯蚓)
もず(百舌鳥・鵙)

さ行變格活用の濁れるもの

禁ず・信ず等

新制國語讀本

昭和十二年七月廿六日印刷
昭和十二年七月廿一日發行
昭和十一年十月十日修正再版印刷
昭和十三年一月十五日修正再版發行

定價　卷一——卷九　各六拾錢
　　卷十　各五拾八錢

編者　東條操
東京市神田區神保町一丁目一番地

發行者　株式會社三省堂
代表者　龜井寅雄
東京市蒲田區仲六鄉一丁目五番地

印刷者　株式會社三省堂蒲田工場
代表者　龜井豐治

發行所
（東京市神田區神保町一ノ一）
振替口座東京三一五五五　株式會社三省堂
（大阪市西區阿波座下通二ノ六）
振替口座大阪八一三〇〇　株式會社三省堂大阪支店

不許複製

東　新東條國文　村井製本

Hisasi

Akutagawa

第一學年　芥川　久

芥川

久

第十三學級

芥川久